

は八百屋魚屋に至るまで、各特種の文學を味つて、あらゆる階級の人に、文學の趣味が普及されました。それ故文學の種別も洵に澤山あつて、燦爛目を奪ふばかりな有様です。室町時代では連歌、謡曲、鎌倉時代では隨筆、軍記自から種類が限られて居るが、徳川氏時代には、あらゆる部類のもの、古跡の文章も出来れば、新跡のものも出る。道義の書も出れば、小説も出る。發句も出来る。淨瑠璃も出来る。昔の模倣も、新しい創造も、入り亂れて現はれて居ります。これは徳川政府が學問を奨励した結果で、一つには泰平が長く引續いて、こんな見事な結果を得ました。是かしながら、徳川時代の文學に免るべからざることは、階級の區別であります。社會の階級たる封建制度は儼然として、身分の變動を許さない。上流と下流とは劃然たる隔りがあつて、相混和することが出来ない。従つて上流社會の文學と下流社會の文學とは、自ら分界が立つて居ります。上流社會は保守的で、復古の精神に富み、下流社會は進歩的で、創意を好みます。即ち貴族的平民的の兩方面があります。平民的文學は創意の點はあるが、惜し

い事には淫猥に傾きました。足利文學にはこの點は甚だ少い。室町時代の狂言などは、滑稽諧謔を極めるが、猥褻な所は少しもない。坊主や隠遁者、そうでなくとも上流の人の間に行はれたものです。自らその相違があります。徳川の平民文學は、全く下流社會の間に發生しまして、下流社會の嗜好に投じたのであります。自然と猥褻卑陋に流れて居ります。文章の筆力などにては、中々結構なものがあるが、學校の教科書などにする資格がないのは、残念至極な事であり、それ故これ等の平民文學は、概して中流以上の士君子から排斥せられて居つたもので、儒者の數が一方に於て、忠孝の道をやかましく言ふに引換へて、一方では淫猥な輕文學が澤山に現はれたのであります。繪畫の發達を御覽なさい。狩野家とか、土佐家とか、眞面目なものが一方にあつて、舊式を守る傍らには、浮世繪と云ふものが發達して、社會時様の風俗をうつし、隨分猥褻な畫までも書き出すやうになつた。文學も其通りな有様であります。一方に於ては昔の狩野風の文學もあり、又浮世繪風に下流社會の



風俗を寫すと云ふ文學も出來た。すべてこの頃の有様上流の人が琴を弄べば下流の人は三線を弄ぶ。貴族社會が能をやれば平民社會は演劇を樂むといふ風に何事も自ら上下の二潮流をなじて居ります。是は性質の上の區別であります。

それから時代に就いて區別すれば第一期文學の中心ともいふべきは元祿時代であります。元祿時代は即ち赤穂夜討の時代で文學が大に起つた時代であります。徳川の幕府が立つてから百年程です。次には文化文政年度。是は家齊將軍の時代であります。これが後期の文學の最も繁榮な時代と思ひます。さてこの二つの時期中で元祿の時代は難波京都を中心として起つた時代、後の文化文政時代には其中心が江戸に移つたのであります。江戸は新しく興つた都であるから始めの元祿時代にはまだ盛に文學が興る丈けの基礎がなかつたものと見えます。然るに明和頃から段々と文運が江戸に移り文化文政年度に至つて大に江戸の文學が起つたのです。一概に江戸時代の文學と稱しますが、始めの文

學は江戸に生れたのでなく、京都大阪に發生した文學だと云ふことは注意しなければなりません。一言で申せば京阪地方は昔から權力學問の中心でありましたが、幕府の創立と共に政治上の權力は早く江戸に移つて文學は少し後れて移つたのであります。

關ヶ原の軍が濟んだのが慶長五年、これからが徳川氏の世になります。その後十五年ばかり立つて元和元年、大阪の豊臣氏が亡びてからは、刀は鞘に収はれ袋に藏まつて、芽目度の太平の世になりました。それで學問もそろそろ頭を出します。前にも申上げた通り家康は學問好きの人で、藤原惺窩や林羅山を登用して大に儒學を起しましたが、これが本になつて一時冬枯れになつて居つた學問が段々と春めいて参ります。兎に角人の心が學問といふとに傾いて参りました。これ迄は學問の家は菅江二家で、昔からの家格で極つて居つて新しい研究も何も無かつたのです。がこれからは學問をすれば腕づくで随分名をあげることも出来る。自分の階級を打破つて立派な人になることも出来るといふ様な譯



藤原惺窩

で、それも一つは獎勵になつたに違ひありません。この慶長年間には、幕府の命令で國史律令の書物などをはじめ、色々な書物を集め、それを活字版で以て印刷しました。上の方からかういふ風に學問を獎勵すれば、學問の盛になるのは瞬く内の事です。鎌倉、足利の世などには、上の方からの獎勵が、ちつともない。學問は坊主の手に隠れて居つたのです。が、今度は坊主の手から段々離れてきます。惺窩も初めは坊主になつて佛學をやつた人ですが、後には佛家の説を大層排斥して飽までも儒者で推通します。併し惺窩や羅山はまだ頭を圓めて居りました。少し後の人ですが、谷時中、山崎闇齋なども皆一度は僧門に遁入つて後に儒に歸した人です。要するに儒學、其者が僧徒の手を離れて政教の道は、こゝに在り、と名乗つて出る世の中、爲つたのであります。この頃は朝廷の方でも、後陽成、後水尾それから後光明天皇など、代々學問好きの天子様が御揃ひで、後光明天皇は惺窩の集に勅序を賜はつた位であります。まことに學問の尊ばれる世の中になりました。羅山は博覽の人で、和漢の學問

中江藤樹

に通じて色々な著書もあり、門人も澤山あり、學問上大功勞のおつた人であり、足利時代に在つて已に其端緒を開きました。宋學五山の禪教に潜んで居つた程、朱の學問は、こゝに至つて幕府に採用せられ、遂には諸大名も之を學んで、全國に廣がる様になりました。だから、家康が政教の目的も達せられた譯であります。朱子學ばかりではありませぬ。この頃、近江國に中江藤樹といふ學者が、出ました。この人は初めはやはり朱學をやつた人ですが、後には王陽明の學を修めて知行合一といふとを説いて、徳行を以て人を率ゐました。から、近江聖人といはれた人です。門人に熊澤蕃山といふ人があつて、これが備前岡山の池田光政侯に登用せられて、大に治績を顯はしました。こんな風に儒學者が實際の政治に關係して、功績を著すことが多いので、諸大名は皆學者を貴び、益、學問を獎勵し、學問は彌、經世の道、眞と見做され、ました。茲に惺窩の門人の一人、松永昌三といつた人の弟子に、木下順庵といふ人があつて、これか江戸に來て弟子を教へましたが、有名な

木下順庵



新井白石、室鳩巢、雨森芳洲などいふ先生は皆この順庵先生の門人でありました。これが丁度かの元祿時代にあたります。

伊藤仁齋

物徂徠

朱學や王陽明の學問は後世の學問で儒學の本意ではない。これは老子や佛家の説を交へたものである。もつと昔しの方へ遡らなければ本當の事が分らないと唱へ出して、大に古學を唱へた先生は、京都堀川に塾を開いて居つた伊藤仁齋です。この人は修身仕へないで、貧賤に甘んじた立派な先生です。朱學が廣かつたについて、一の反動が興つたのは即ちこの古學家の説であります。之について江戸の方には、荻生徂徠が復古學を唱へ、明の李于鱗、王世貞などの古文辭を學んで、復古の氣運は益盛になり、ました。これよりも少し前かたに、明から朱舜水といふ學者が日本に來ました。これは丁度此時分、支那では明が亡びて、清朝に成りましたから、向うの節義のある人はちやん／＼坊主になるのを屑としないで、日本へ逃げて來たのであります。水戸の明君といはれた光圀卿、即義公は此人をかくまつてやり、ました。こんな鹽梅に儒學は一時に盛

になりまして、政事家もあれば、學者もある。古學もあれば、朱學もあるといふ風になりましたが、要するに節義を尙び、道德を重んずる學風で世の中を固めました。徳川の世になつてから、百年足らずこんな盛んな有様になりました。これが即ち元祿時代の盛りの世の様です。

細川幽齋

儒學の起つたのは全く上朝廷幕府の奨励によるものではありませんが、太平が續くにつれては、學問に従事する便利が殖え、人々が學問をするにも、段々都合よくなるからでもあります。それ故大平が續けば、一般の文藝美術もそれにつれて發達して参ります。別段に奨励を與へないでも、随分自然に發達をするものであります。徳川になつては歌讀み、和學といふ方はどうなつたかといふに、これは儒學の發達よりは、やゝ後れて居ります。慶長、元和の始には細川玄旨、法印といはれる人がありました。この人は例の古今傳授を受けた人で、昔風の歌讀みです。當時では随分博識な人でありましたが、世の中が、秘事秘傳を貴ぶ時代で、その範圍を脱することは出来ませんでした。その外冷泉家、飛鳥井家など堂上家の



松永貞徳

人々はやはり昔し通りの窮屈に縮まつた中に、歌學を守つて居りました。この玄旨法印の門人に、松永貞徳といふ人があつて、歌もやれば俳諧もやり、丁度太平の世に生れ合ひましたから、顯貴の人々にも寵遇せられて中々名高い人でありました。かの順庵の先生であつた松永昌三のお父さんです。この人は晩年には盲目になりましたが、頗ぶる奇人で、三人の童子を使つて珍重満足祝着といふ名を付けて置いたさうです。歌の方にも歌林檎樸などいふ著述もありますが、俳諧には淀川、油粕御傘などがあつてかの犬苑玖波集をついで居ります。歌の方の弟子には望月長好、加藤盤齋などいふ人が出ました。長好の門人が平間長雅です。長好の門に有賀長伯があつて元祿時代に榮えました。さて又俳諧の方の弟子には、松江重頼、鷄冠井令徳、高瀬梅盛、山本西武などいふ面々があります。が最も名高いのは北村季吟です。この人は博覽多識、出藍の譽があつた人で、元祿二年に幕府の方へ召されて江戸に参りました。この北村季吟の弟子に松尾芭蕉といふ人があつて、大に俳諧の道を振ひ起しま

北村季吟

した。これも丁度元祿時代にあたります。和歌や俳諧が元祿時代になる迄は、まづそんな鹽梅でございしました。

それで元祿時代の文學の有様をすつと見渡しますれば、儒者の方では京都に伊藤仁齋、江戸には林家はいふに及ばず、荻生徂徠其弟子に、太宰春臺、祇園南海などが居り、木下順庵には弟子に新井白石、室鳩巢などが居つて、いづれも容易ならぬ大學者揃です。國文學の方面から見ましても、この時代の漢學者の作つた和漢混澁文が、即今日の普通文の基礎をなしたものであります。春臺の獨語、白石の讀史餘論、折焚柴の記、藩翰譜、鳩巢の駿臺雜話など、今日でも國文讀本の中に澤山採られて居るものです。かの色々な訓誡書を書いた貝原益軒もこの時代にあたります。大和俗訓、家道訓、五常訓等、儒教の道述べたものもあるし、木曾路の記、大和巡など、旅行の道を教へたものもある。この人の目から見れば、どちらも人の踐むべき道です。平易通俗な文章で、道を廣めたのです。疵のない文章ですから、教科書などには多く取られて居ります。すべてこの時代の

新井白石

貝原益軒



漢學者は中々和學をやつたもので、仁齋なども古學先生和歌集などいふ歌集もあります。中にも新井白石の様な人は、和漢洋を合せた學者で、博覽卓識、詩も出来れば文章も出来る。若い時は俳諧もやつたといふとですが、この人の作つた藩翰譜などの文章は、源平盛衰記や、太平記などの戦記物語も、充分に噛み砕かれて道入つて居つて、實に立派な隙のない文章です。後の和學者などにも、あれほどの名文は決して見當りませぬ。さて又一方の和學者の方では、北村季吟が江戸の歌學方で、古書の註釋を澤山に作りました。湖月抄や春曙抄をはじめとして、万葉伊勢土佐、徒然朗詠に至る迄何でも註釋を作りました。すべての古註を集めて大成した人で、多少の誤謬はありますが、其功勞は没する事が出来ませぬ。和學の大に起るのはこの人の功勞が餘程多い事です。けれどもこの時代はまだ秘事口傳を貴ぶ時代で、季吟の書いたものにも、これは口傳にあり、杯といつて隠してあるところもあり、どうしても古い派の人であります。所がこの頃は漢學に於ては古學派の盛に起つて、學說を立

戸田茂睡

て、居る時代です。和學に於ても復古學の起るのは當然の事です。鎌倉以來の秘事口傳を貴んだ狭苦しい學問世界は今や眼界が廣くなつて、そんな窮屈な制限を受けては居りませぬ。漢學者の復古派につれて、國學の復古派が起るのは、免るべからざる勢になりました。

下河邊長流

契沖

歌の道に於て始めて復古論をしたのは、江戸の隠士戸田茂睡でありました。この人が梨本集といふものを書いて、鎌倉以後歌の學問の門戸の狭隘なるを頗に論しました。この梨本集は元祿十三年に出版したものです。この時代に西の方大阪では下河邊長流、釋契沖といふ二人の人があつて、万葉集の研究をはじめ居ります。長流は大和の人で、中年から攝津にうつり住んだのです。漢學も随分やつた人で、中々氣位が高い。一生妻を貰はず、讀書三昧に日を送りました。契沖は父さんは尼崎の藩士であつたが、十三の時から出家して佛學をやりました。其後圓珠庵といつて大阪餌差町の寺に住んで居りました。この二人が互に中よしで、朝も晩も往來して、万葉集を研究しました。殊に契沖は音韻の學問



もやつた人ですから、昔しからの假名遣の誤などを正し、古説には泥ま  
ないで、新しい自由な研究を初めました。水戸ではこの前から大日本史  
編纂の企があつて、色々學者を集めましたから、契沖を雇はうとしたが、  
契沖は承知しませんかつた。そんならば万葉の註を書けと頼まれて書  
いたのが万葉集代匠記です。その外勢、臆断やら源註拾遺やら、厚顔抄  
やら色々ある。長流の歌集が晚花集、契沖のが漫吟集といひます。長流と  
契沖の二人が先づ國學者、復古學派の魁です。

荷田春滿

それから又京都には荷田春滿といつて、伏見の稻荷山の神主が居りま  
した。此人は中々氣概のあつた人で、國學の學校を京都の東山へ建てよ  
うと骨折つた人です。幕府では湯島の聖堂が出来上つた時代ですから、  
和學の學校も一つ建てようかと考へたのです。惜しい事には其志を果さ  
ずに死にました。この人の門人が即加茂真淵で、真淵に至つて大に國學  
が起りますから、春滿の志も成つたといつて宜しうございませう。春滿は  
春葉集といふ歌集もありますが、生涯戀歌は讀まなかつたと申します。

著述も死ぬ前に皆焼いて仕舞つて、残つて居るものは少しばかりしか  
ありません。引きくるめていへば、和學の方は漢學の復興よりは、後れま  
した。が、やはりこの元祿時代になつて復古學者が現はれたのでありま  
す。水戸では元祿より前に扶桑拾葉集といつて日本の文章を集めたも  
のも出来、國史の事業は着々と歩を進めて、色々有益な著述が出来て居  
ります。もと光圀卿が修史の事業を思ひ立たれたのは、羅山の子の春齋  
が作つた本朝通鑑に、日本は呉の大伯の後たど書いてあつたのに憤慨  
されたといふとですが、すべて漢學の盛になつた餘りには、支那を崇拜  
する傾も出来、获生總右衛門といふ名が支那風でないからといつて、物  
部氏だから物茂卿など、稱するといふ様な風、尤もこの事は經國集杯  
の時代からあるが、になつて支那を中國、日本は夷狄だなどと思ふ様な  
弊も出来ました。荷田春滿の様な先生は、かういふ事に大に憤慨された  
に違ひありません。國學の勃興したのは、漢學の勃興したのに就いての  
一つの反動とも見られます。



この元祿時代には復古の氣運、改革の氣運が活動して、少しも休みませぬ俳諧の方に於ても、一大革命が起りました。それはやはり古い流派の季吟の門下から現はれました。即前に申上げた松尾芭蕉がこの元祿時代にあつて、俳諧の革新を仕遂げた人です。この人は伊賀の人で、藤堂家の家來でございしました。藤堂家の若君に藤堂其忠、俳名を蟬吟といはれる人があつて、この人と一處に俳諧を學んで居つた。所がこの若君が若死をされたによつて、世の中を果なんぞ京都へ往つて、季吟の門を叩いて勉強をはじめたのであります。この人が起した正風躰の俳諧といふものが、我文學史の上の大事な産物であります。この芭蕉よりは少し先輩でせう。西山宗因といふ人があつて、大阪に檀林風といふ一種の俳諧を流行らせました。此人は前に御話申上げた貞徳門の松江重頼の門人です。芭蕉とは從兄弟弟子ともいふべきものです。從兄弟弟子の一人が大阪で檀林派を起し、一人が江戸で正風躰を唱へたのであります。檀林風の長所は滑稽であります。俳諧躰が一層滑稽になつたのであります。

足利以來の俳諧躰連歌が貞徳などの手を経て、一層滑稽になつたのであります。檀林派に至つては、言語の上にも思想の上にも滑稽輕妙といふばかりを本意としました。芭蕉はその後に、出で、それを拒絶したのであります。芭蕉は詩や歌の精神を、その十七字の短詩中に入れたものです。これ迄の俳諧は詩や歌とは違ひます。詩や歌は極めて眞面目なのに引きかへて、俳諧は言語の上にも思想の上にも滑稽を宗としました。所が芭蕉はそれを捨て、仕舞つて詩や歌の通り、極めて眞面目になつたのであります。そうして發句の獨立した形、即十七字の短い詩形が、言語に於て、思想に於て、從來の歌よりはかへつて大に其範圍を擴張しました。この正風躰の俳諧の起りましたのは、決して檀林派の反動、即俳諧變遷の一彼瀾のみ見做すべきものではありません。一方に於ては、和歌に對しての反動であるのです。其時代に行はれた俳諧の滑稽な部分は棄てました。又一方に於て歌の様な窮屈なことは取らぬ。檀林風の自由自在な主義を取つて、隨分卑俗な言葉も構はず。歌の方では讀みにくい事



も容易く讀んで見せたのです。一々師傳をやかましく言つた當時の歌は理想もなく、氣骨もなく、昔の人の精粕の嘗めるに過ぎなかつたのを、芭蕉が十七字の引緊つた詩形で救はうとしたのです。これはかの復古學派が万葉古今の昔に遡つたのと同様、つまりは八代集以後衰頹した和歌の惹起した反動作用とも一面からは見られるのです。

兎に角芭蕉の成し遂げた仕事は立派な仕事といはねばなりません。歌詠と云へば品が宜いが思想が枯れて仕舞つて形ばかりを裝うて居る。それでは全く死んだ文學者です。三十一文字に並べさへすれば宜いと云ふ様に昔の人の句を盗んで歌を作るといふのは、歌の形丈けがあつて昔の裝束をして居ると云ふ丈で、精神は全くないものです。又これまでの俳諧は卑俗な言葉遣つて滑稽に流れたが、正風躰では卑俗な言葉遣つても品の宜いものを心がけたのです。冠をかぶつて品を良くしようと思ふことは出来るが、類冠りをして品を良くしようと思ふことは、中々六ヶ敷いのである。芭蕉の腕の高いことはそれで分ります。芭

蕉は詩も歌も學びました。唐の杜甫の詩を好んでよみ、又西行法師の山家集を愛讀してその風骨を學んだといひます。これで芭蕉の理想は分ります。俳諧躰の連歌とか檀林風とかの滑稽酒脱な風より一轉して、酒脱が酒脱たが、寂寥枯淡といふ禪味を俳句の中に入れて來て、多少厭世の風を帯びて居るのです。芭蕉の人物は鎌倉時代の人です。

古池や蛙飛こむ水の音

此發句が芭蕉の正風躰の極意といはれて居ります。これ即ち芭蕉が悟りを開いた句です。正風躰の發句の回歸點を作つて居ります。かう云ふ發句は昔の檀林風の發句には決してないのです。檀林風の發句を一つ二つ擧げて見ると、

松に藤鮎木にのぼる氣色なり

宇治橋の上や茶の花咲くや姫

時鳥如何に鬼神も籠かに聞け

世の中は蝶々どまれ角もあれ



と云ふやうな鹽梅に言葉の上にも、思想の上も滑稽です。輕妙な可笑味を主としました。併ながら正風躰の如く自然の幽玄なる所を歌つて高遠微妙なる感を惹起すといふ様な事は無い。その缺點を芭蕉は着目して補つたのであります。それ故正風躰の俳句は實際の系統は俳諧躰連歌から引いて居りますが、思想は確かに詩歌から這入つて來たのであります。そこが値打のある所であります。もう一つ考へて見なければならぬことは、禪宗のことであります。それを旨く利用したのであります。芭蕉並に芭蕉門下の十哲といはれた十人の門弟どもは、皆禪學をやつた人であります。禪學は淋しい寂寞と云ふことを貴ぶ宗旨で、捕捉し難いところを以て心傳心と言ひます。譯の分らぬ事を譯の分らぬ内に了解して居るやうな事が得意です。問答でも短いのを貴ぶ。さう云ふやうな事を發句の方へ利用したのであります。よく調べましたら禪宗の法語などと云ふやうなものと同じやうな思想が澤山あらうと思ひます。芭蕉の發句は一の現はれた現象を示し、進想作用を以て、他の種々の境遇

を知らせるのであります。唯現れた事丈を翻譯したならば、古池や蛙飛込む水の音など云ふのは少しも意味のないことでもあります。私が曾て或西洋人に日本の發句と云ふものはどんなものであるかと問はれたときに、古池や蛙飛込む水の音かう云ふものであると言つたが、中意味が分らぬ。西洋では蛙といふものは非常に可笑しな滑稽なものである。それが古池へ飛込んだところが何か面白いかと、かう言つたが、其風骨と云ふものは西洋人には一寸分らぬのです。發句には進想が肝甚です。先づ古い寺か何かあつて、大きなこんもりとした木でもある。そこにあまり大きくない池がある。少しも聲の聞えないやうな所である。其處へ一人で立て居ると、蛙が飛込んで、水の音が聞える。又この古池に就いてはいろ／＼な昔話もあると云ふことで、面白味が出て來る。唯この一句見る人によつて胸中に畫かれる状態は、各違ひませう。明らかに總てを言現はして仕舞はずに其急所を捉へるところが面白いのです。其急所を捉へて、それで總ての景色を思はせると云ふのである。ち



二一〇  
饒舌で悉皆言つて仕舞つたのではない。一部分を言つて、あとは連想で  
思出させること云ふのが面白いのです。烟が上れば其處に火が焚いてあ  
ると云ふことが分る。眞の値打と云ふのは其處にある。是が芭蕉の發句  
です。それ故短い詩形が最も適當して居るのです。丁度臆や確言が簡單  
を要すると同心様なものです。芭蕉の發句を集めたものには幽蘭集、一  
葉集、俳諧七部集などを見れば分りませう。七部集には大鏡といふ註釋  
があります。その中に芭蕉の句を註釋したものは四十七八種もあると  
書てあります。其盛ん事實に驚き入ります。芭蕉の弟子には其角、嵐雪、許  
六、去來、北枝、曾良、野坡、文章、支考、越人など云ふ。是が先刻申した十哲であ  
ります。就中其角は其角堂と云つて、其門を江戸座と稱へた。嵐雪は雪中庵  
と云つて、此人の門を雪門と稱へる。此二人が十哲の中でも豪傑であつ  
た。其角は餘程磊落な人で芭蕉の世の中に順着せぬと云ふことを學ん  
だ人である。其角は多藝な人の代り、無茶苦茶な人でありませう。嵐雪は大  
人しい人であつて、芭蕉の大人しい所を學んだらしい。弟子の人物も各、

違ひますが、世事を厭がつて、家を飛出して來たり、自分が學問をしたい  
爲めに坊主になつたり、とかに共同の性質が見えます。要するに此時  
分の俳諧者は思想も深い所があります。富貴聲譽の街から遠かつて居  
るといふことは芭蕉を中心として一致して居ります。芭蕉の門に遊ぶ者  
は數千人に及んだと云ふ位盛んであります。其弟子や門派など今一  
一申述べる暇はありませぬ。伊勢の人で生川春明といふ學者が拵へた  
俳家大系圖といふものがあります。又經濟雜誌社で出した人名字書に  
も俳諧者の表が付いて居りますから、それ等でも御分りになりませう。  
博文館では近頃俳諧者の集を段々と出します。其中にも大野洒竹君の  
著された系圖が見えました。  
芭蕉は文章も作つた人です。芭蕉並に芭蕉の弟子、此人等の文章は俳文  
といふ一躰となつて居ります。芭蕉の書いたものに奥の細道と云ふの  
がある。是は奥州へ往つたときの紀行。奥州から伊勢の方まで廻つたと  
きの紀行文である。芭蕉翁文集といふものもあります。それから其角の



類相子なども面白い。支考の本朝文鑑には多くの人のを集めて居ります。許六の風俗文選も同様です。これ等はいづれも近頃活字本に翻刻せられました。この俳文と云ものは一種の研究すべきものである。どこかに脱俗の所が見えて、一種の滑稽も道入つて居る。文藝から言うても餘程面白い。俳諧を作る考で文章を作る。天仁遠波などを無暗に省く。文法からいふと文法上の間違は免かれぬが、文格として一の企が見えます。支考の又弟子で尾張の人に横井也（有といふ人）がおりますが、此人が俳文を大に發達させた。それは後に御話しようと思ひます。兎に角芭蕉並に芭蕉の十哲と云ふやうな人々はかう云ふやうな著述を爲し、文章も書いた人であつたのです。徳川時代の平民文學は概して猥褻であるのに芭蕉一派の俳諧はさうでない。教科書などへも芭蕉の發句などは入れて宜いと思ふ。奥の細道などの俳文も入れて宜いと思ひます。禮林派西山宗因の門人に井原西鶴といふ人が居りました。此人が小説に於て元祿時代の花を咲かせました。之より前、寛文の頃には色々昔の

井原西鶴

本を出版したり、支那を書物も翻刻したりしましたから、足利の末頃の物語卿子なども段々版になりました。中には舊い物か、新作か分らぬのも澤山あります。京都に淺井了意といふ人があつて種々の小説を書いたが、この人は元祿の始めに死んだ。この後に出たのが西鶴です。二萬首の發句を北野社へ奉納して、自ら二萬翁と唱へたといふ人です。俳諧には達者な人でした。此人が俳文を利用して小説を作りました。元祿物西鶴物といつて、尾崎紅葉君などが大層に珍重されるのは即この文章です。西鶴の文章は疑もなく、俳諧者の文章であります。天仁遠波をば成るべく省いて、文章はいくらでも續けて行くのである。續けられる文は續けてゆく様に見えます。これは議論文などには應用は出来ぬが、小説などには餘程面白い事です。かねて御話した通り、天仁遠波、助動詞などが多いから、自然文章の形が單調になつて氣力も弱くなる傾がある。俳文は其弊を搔はんと試みたものである。俳諧者の文章には一種の妙な力があつた。千變万化人をして應接に遑なからしむると云ふ風がある。つ



よい漢語を使はないでも氣力あつて、まかも輕妙です。天仁遠波を省く傾きは謠曲の文にも見えて居り、新古今集の歌などにも見えて居ります。すべて文學の變遷は一朝一夕のものではない、其由來の久しいといふことを知らねばなりません。これが即文學史の必要な所以です。さてこの俳文は一方に於て又卑俗の語を嫌はずに容れました。卑俗な語を以て卑俗な事蹟を寫して、いはゆる平民文學といふ性質を示して居ります。此人の著述は重に好色本といふものです。中には武家義理物語などいふ名もありますが、多くは當時の花柳社會の有様を寫しました。當時の町人の惡所通の様などを寫し出しました。好色一代男、二代男、好色一代女、好色五人女、男色大鑑といふ様な、いつれも男色女色に關した猥褻なものです。其寫し方は極めて寫實的で、随分精細に穢い所まで書いてある。一代男の主人公は世之助といふ男であつて、六歳の頃からあまたの女子に戯れ、最後に女護の島へ渡つたといふことを書いたものである。これ即源氏物語の光源氏に比ぶべき人でございませぬ。西鶴が大體に於

て源氏物語を學んだことは、疑のないことです。この事はかつて、水谷不倒君が對照して論ぜられたかのやうに記憶します。平安朝の優柔な社會は源氏物語を出しました。數百年の後、元祿の文學復興時代は源氏をもととしたこの一代男が現はれました。併ながら一は雲の上人の艶話で、一は町人遊女の情事、その間に色々な差別があります。西鶴は紫式部と同じやうに寫實的に腐敗した社會を寫し出したのです。その筆は透徹せざることをなしといふ有様で、如何にも精細によく寫して居ります。が、惜しいことにはその文章には何となく輕佻浮薄な風があつて、神韻といふものに乏びしい。随つて人の同情を惹起すといふ力は薄いやうです。話の上面、大體の筋ばかりを書く小説家などとは違ひ、心の中まで遣入つて寫し出すと云ふ筆の力には、餘程確乎としたところがある。書いてあることは如何にも猥褻であるが、その筆力は立派な文學者といふ資格を失はない。後の文學に與へた影響も一方ならぬことです。西鶴は別に淨瑠璃も作りましたが、淨瑠璃の方ではあまり發達しませぬか



つた。

淨瑠璃は小野お通といふ人が淨瑠璃十二段草子といふものを書いたのを其先祖といたします。淨瑠璃といふ名も、これからついたのです。これもやはりも祿頃になつて近松門左衛門の手によつて著しい進歩をなしました。この人はもと長州の人で、肥前の唐津などにも住んで、一時は坊主になりましたが、其後還俗して京都へ出て、一條家に仕へたのであります。後又之れも辭して専ら身を文筆に委ねて、淨瑠璃を書くやうになつたのであります。この人が淨瑠璃を書くことに就いては、三味線が大變な勢力になりました。三味線を弾いて語つて呉れる人が一方にあつたので、それが門左衛門を奨励して、淨瑠璃を書かせる様になつたのであります。それに就いては三味線の事もいはねなりません。三味線の傳來についても色々説がありますが、初めは泉州の堺あたりで流行つたらしい。この頃堺は外國船の遣入り込んだ港で、こゝへ三味線も傳はつたのです。最初は盲人などが多く弾きましたが、後には盲人でない人

も弾きました。慶長年間に薩摩淨雲といふ名高い三味線彈が泉州から江戸へ出て來ました。この人は弟子も澤山あつて皆上手に弾きました。江戸では一癖人氣が勇壯活潑でまた戰國の時代を去るとも遠くないから、語るものも同じく武張つたもので、この淨雲の弟子に櫻井丹波少椽といふ人があつて、金平本といふものを語りました。これは坂田金時の子に金平といふものがあつて、それが鬼の千人斬をしたり、方々へ出掛けてゐるい奴を退治したりする様な事柄を以て骨子としたもので、事柄は極めて單純な物でありました。それには又人形芝居が伴つて人形を踊らせたのであります。この時淨瑠璃を作つたのは岡清兵衛などいふ作者で、それ程の文學者とも思はれなかつた併し一時の流行は餘程盛んな有様であつたと見える。ところが其後土佐節、江戸節、河東節など折々に流行して、江戸の音楽は段々弱くなつた。ところで薩摩淨雲の弟子に虎屋源太夫といふものが京都の方へ往つた。其弟子にはえらい人が出來て、段々と發達したが、元祿時代になつて、其孫弟子に竹本義太



夫と云ふ者が大阪に出て、是が三味線を能く弾いたのみならず、色々の謠方を折衷して長を取り短を補つて、良い節を拵へた。此義太夫の爲に筆を取つたのが、即近松門左衛門であります。近松門左衛門の筆力で書いたものを義太夫が語つたから、非常に喝采を博したのであります。これで兩方に勵みが出来て、大に淨瑠璃の發達を促しました。謠曲は愈情的戯曲ともいふものでありませう。こゝに至つて本當の戯曲が出来ました。謠曲の上流社會の慰み物たるに對して、戯曲は下流社會の慰み物として現れて來ました。従つて卑陋穢雜の點はやはり免かれませぬが、文學としての發達から見ますれば、實に著しい點があります。門左衛門の戯曲は、時代物と世話物との二つに別つことが出来る。時代ものは歴史の戯曲で、重にも歴史上の材料を取つたものである。世話物といふは、即ち社會的の觀察を以て著はしたものである。謠曲に於ても已にこの二種の區別があることを御話しましたが、時代的の材料は多く謠曲より一轉したものですから、源平時代の材料が多いのです。色々

な曾我物はもとより頼朝七騎落源氏烏帽子折出、世景清紅葉狩、劔本地など皆な謠曲から脱化したものです。これは前にも御話した通りです。單に謠曲から出たといふばかりでなく、久しく人の耳目に觸れたものでなくては、分りにくいからであります。門左衛門は若い中は、時代物はかりを作りました。が、晩年に至つて社會觀察の眼が、段々鋭くなり、遂に世話物を拵へました。門左衛門の値打は、畢竟するに其世話物を第一とするのであります。歴史上に何の名もなき匹夫匹婦をつかまへて、其運命によりて人間社會の狀態を寫し出すと、門左衛門は或る點まで成就しました。こゝが貴いところですから、之を謠曲に比すれば、謠曲には佛教が主になつて居つて、坊主が人間の無常なる所を寫すと云ふのが主であつた。戯曲に至ては、佛教が其骨髄です。佛法の考といふものは極めて少ない。此時代は先きにも言つた通り、赤穂義士の夜討のあつた時代である。親の敵を討つ時代である。忠孝の義理が根本から染込んで居る時代である。源義經や平景清がした仕事は、世の中を驚すやうな仕事であ



つた事は誰にでも書ける。匹夫匹婦の裏店に住まつて居るやうな人の事を書いて人を感動させると云ふやうな事は、餘程六かしい事です。門左衛門はこのむつかしい事を成就しました。門左衛門の著した人物は大抵放蕩無頼の人間であつて、多くは花柳社會の婦人に關係し、うかれ女に魂を奪はれると云ふやうな人物が多いのです。けれども、さういふ人間をつかまへて道義と人情との争を示しました。道義に於てかくかくの事は道ならぬ事と思つても、人間には弱點があつて、知らずくに其道ならぬ事を犯すことがある。そこがつかまへ所です。如何に下等な人物でも多少の義理を辨へて居る。遊女のたぐひは人情はない筈である。普通の人情とか戀愛とか云ふものはない筈である。然るに近松門左衛門はそれ等の遊女の中に貞節も認めました。放蕩無頼で家の破産するのにも顧みぬやうな義理も何も分りさうもない道樂息子にも、一片の道義理良心があつて、親に孝行をすると云ふ文は忘れぬ。又は君に忠を盡すと云ふ觀念は何時でも忘れぬ。如何なる不名譽な女でも、如何なる

無頼な男でも、君父への忠孝といふ事は決して忘れぬ。其中に妻が夫に對して貞節を守る。放埒で勘當した子にも、親の慈悲はかゝる。表向きの法律上の制裁、社會上の制裁からいへば、世間上の躰面もあり、人間の道もあり、家の掟もあるから、其方からは罰しなければならぬが、そこには人情であつて、悪るい奴でも成るべく慈悲を加へてやりたい。一旦は人情の弱點に驅られて、道を踏外しても、良心は飽くまでも失はぬ。忠孝といふことの道徳的觀念は決して失はぬ。これは、兩立しないやうな事柄であるが、兩立して相戻らぬ。これを以て人の同情を惹き、匹夫匹婦の間にも人の道の行はれ、天意の行はるゝを示してある所が、戯曲の大精神です。情死といふことは、誠に詰らぬ事に違ひない。男と女とが痴情の果てに身を果たすと云ふことは、極めて愚な事です。併ながら、其愚な事を、愚とのみ見るは、道徳者の眼です。一方に於て、人情の底から見る、詩人の眼には、哀れな心の悲痛が映ります。男女の間の穢ない關係であるが、其中に人間の高尚な義理が合まつて居る。下等の社會、下等の身分には居



るが、貞操もあり、義心も堅い。或は妻が身を賣つて夫の困難を助け、子供を身代りに立て、主人の生命を救ふ。かういふことが、徳川時代を通じて、芝居の材料であります。小供の首を切つて主人の身代りに立てるとなどは、誠につらいことである。其話を喜んで涙を流しながら聞いたのが、當時の人心です。當時の人心のみならず、余輩は今でも涙ながらそれを見聞くのであります。門左衛門の淨瑠璃は、その極致を穿ち得たのであります。いはゆる心中物と云ふものは、即ち西洋でいふ悲劇といふものに相當したるものであります。これが最も値打のあるものであります。近松門左衛門が始めて世話物を書いたのは五十一の年であります。それからして七十二で死ぬ死際まで始終書いて居つたのであります。曾根崎心中、女殺油地獄、心中重井筒など色々あります。門左衛門の戯曲はもと謠曲から變化したもので、大體の結構はすべて謠曲に似て居ります。天仁遠波を省いて口調をよくし、音節に合せた事、俗語を導いて古今雅俗をわけせた手極など非凡な才筆といはねばなりません。もと暗

る爲めのもので、すから西洋のドラマとは違ひます。ドラマに似たのは後に出る脚本であります。

近松門左衛門の戯曲は近年いろ／＼活版になつて出ました。註釋書には難波土産といふのが少しばかりあります。評註日本淨瑠璃叢書、山田美妙齋君が出したものがあります。淨瑠璃の發達の事を書いたのは小中村清矩先生の歌舞音楽略史、寺山星川君の淨瑠璃史など古いもので、齋藤月吟の聲曲類纂と云ふものを御覽になれば宜からうと思ひます。

以上御話ししました様に、文學の各方面は元祿時代に至つて大なる發達をなしました。そうして是等は主として西の方に發達したものであります。伊藤仁齋も、西山宗因も、井原西鶴も、近松門左衛門も、いづれも上方に起つた文學者です。江戸の季吟、芭蕉も固より素養は上方で養つたのです。江戸はまだ文學の中心にはあられぬのであります。後期にはあらゆる文學上の勢力悉く江戸に集まつて参ります。



第九講 近世文學の二

竹田出雲

近松門左衛門の浄瑠璃に竹本義太夫が節を付けて歌つたのが義太夫節です。浄瑠璃節は義太夫に限らず、清元でも、富元でも、皆浄瑠璃の一派ですが、義太夫節が一番勢力を得ましたから、義太夫節が取りも直さず、浄瑠璃の事だと思つて居る人もあります。義太夫は門左衛門に先ちて死に、門左衛門は義太夫の死後も竹本座の爲めに戯曲を作つて居りました。門左衛門の死んだ後は、竹田出雲といふ人が、門左衛門に次いで浄瑠璃を書きました。この人は竹本座の座主であつて、近松の生前已に弟子になつて、直して貰つて居りましたが、後には獨立して書きました。又この出雲の弟子に、近松半二といふ人がありました。これ等の人々は學問の上からも、文才からも、連も門左衛門には叶ひませぬが、舞臺の具合などが、よく分つて居るから、大體の仕組などは、舞臺にはまるやうに出來て居るといふことです。今日の芝居にする時代物は、大抵此時分の人の

近松半二

紀海音 西澤一風

江島其磧

作つたのが多いのです。有名な假名手本忠臣藏、義経千本櫻、菅原傳授、手習鑑などは出雲の作で、妹背山、婦女庭訓、關取千兩、幟、近江源氏、先陣館、太平記、忠臣講釋などは半二の作です。此外にも紀海音、西澤一風などがあります。紀海音は釋契沖の門に入つて、和學を修めた事もあり、近松門左衛門と相並んで元祿時代に行はれた人です。八百屋、七歌、祭文、坂上田村麿、義経、新高館、末廣十二段などの作があります。一風には建仁寺橋、供養本朝檀、特山、北條時頼記などが傑作です。松田文耕堂といふ人もある。此人も門左衛門に次いで起つて、大塔宮、贖鏡、御所櫻、堀川夜討など色々作りました。これ等は皆大阪の人です。大阪は豊太閤以後、一時に商業繁華の都會となつて、元祿以前も、元祿以後も、一般の文學、殊に平民文學を産出した中心になりました。西鶴のことはどうなつたか。西鶴の後をついだ人は、江島其磧といふ人です。この人が西鶴の風を學んで例の好色本を書きました。それを八文字、舍自笑といふ書物屋と合著にして世の中に出しました。之が社會時



好に投じて大變盛に行はれた所謂八文字舎本といふもの即これです。傾城色三味線傾城禁短氣などその傑作といはれて居ります。處が其礎は自分の書いたものが自笑の名で行はれ八文字屋本で名高くなつたのをつまりなく思ひ今度は八文字屋と分離して自分で出版して見ました。其方はあまり成功しない。八文字屋は多田南嶺といふ人に代筆を頼んで相變らず盛に行はれて居りました。寛延三年南嶺が死んでから難波の文壇も次第にさびしくなりました。明和以後になつては文學の中心は段々江戸に移ります。

## 加茂眞淵

江戸に文學の起つたのは加茂眞淵が江戸に來たのが儘に大なる影響になりました。前に申上げた荷田春滿の門人加茂眞淵翁が江戸に來られたのは寛保三年であります。翁はもと遠州の人で、三十七の歳始て荷田春滿の門に入つた。之が元祿十八年、随分晩學の方です。江戸に來たのは四十二歳の時で、日本橋の濱町に家をかりて住みました。五十になつて田安家に聘せられてからは、一層名高くなつて、其門に遊ぶものも非

常に澤山になりました。縣居翁といひます。之が和學の江戸に興起する大動力になつたのです。眞淵は春滿の志を嗣いで、大に古道を振ひ起したのみならず、歌も文も萬葉の昔に遡つて古調を貴ひました。長流や契沖は萬葉集を研究して、歌も近古以來の束縛は脱しましたが、未一世を風靡する文の力はなかつた。眞淵に至ては、自由自在に古語を使つて、眞に奈良朝の昔に遡りました。加茂翁家集といふものがあります。之かのみなならず、古書を研究して、註釋を作り、語學の研究にも遣入り、また萬葉考、冠辭考、歌意考、神樂催馬樂考、語意考、文意考、杯、皆考の字をつけて居ります。眞淵が東に下つて古學を發揮したとは、江戸の文學に向つて寧ろ一般の國學が起るとに就いて、大變な影響を及ぼしたものです。眞淵は明和六年に七十三で死んで品川東海寺に葬りました。東海道瀛車に乗りの御方は品川驛から少し行くと、右手の方に小な一鳥居が見える。あれが眞淵大人の墓であります。橘千蔭の書いた碑文があります。眞淵が東下して、あまたの門人を得ました中で、今申した橘千蔭と村田



橋千蔭

村田春海

縣居門人

春海の二人が和歌、和文に名高い人です。千蔭の親の枝直は眞淵の友達で歌も作つた人です。東歌といふ集があります。千蔭の集は、うけら、か、花といつて歌も文も集めてあります。春海は商人の子で、漢學に達した人です。此人は和學の學問は眞淵に學びましたが、道は飽迄も孔孟を主張して、眞淵の様に古代の風俗にまで立歸るといふことには服しません。かつた。唐宋八家の文を咀嚼して、國文に應用しましたから、色々新しい法式も考へ窮屈な古語を遣つて中々自由に思想を現はしました。琴、後集といふ集があります。千蔭と春海の二人は眞淵よりは少し下つて古今集時代を標準として、歌文を作つたのです。同門の中でも加藤字万伎、楳取、魚彦などはやはり万葉句調を貴びました。眞淵程の大家になれば、門人も色々に別れて参ります。歌文を専門にして書手になるものもあり、古語を研究して、語學者になるものもある。國史を研究する人もある。荒木田守武、内山眞龍、林諸鳥などは前にも名前を申上げましたが、皆眞淵の門人です。實に盛な有様でした。群書類從を刊行した有名な塙保己一も、

本居宣長

眞淵の晩年に門に這入つたのです。當時遙に眞淵の名を聞いて、門人になつたのは、伊勢松坂の本居宣長です。この人は始めは醫者でしたが、二十六七歳の頃から契沖や眞淵の書を読んで、古學をやらうといふ考を起した。折もよし、眞淵が幕命によつて伊勢に巡廻したから、刺を通して門人になりたいと申込みました。眞淵は快く承諾して、自分は齡次第に傾いて、古事記を研究するとが出来ない。お前は年が若いから古事記を研究して歴史を明めると教へました。眞淵は其教を奉じて、古事記の研究をはじめたのです。宣長の學問の該博であつたと、其研究の秩序的であると、語學、文學、音韻の學問、歴史の學問、如何なる事でも、日本の古い事に關しては、必ず著述のあつたとは實に驚嘆に堪へぬところであり、年は五十二で死にましたが、死ぬ迄の間、國文學の上になした仕事は中々多い事です。近世の國學は、宣長に至つて大成したので、著述は古事記傳を初として、非常に澤山あります。万葉には玉の小琴、古今には遠鏡、新古今には美濃の家、源氏には



玉の<sup>〇</sup>小<sup>〇</sup>櫛<sup>〇</sup>大<sup>〇</sup>祓<sup>〇</sup>詞<sup>〇</sup>出<sup>〇</sup>雲<sup>〇</sup>神<sup>〇</sup>壽<sup>〇</sup>詞<sup>〇</sup>には後<sup>〇</sup>釋<sup>〇</sup>宣<sup>〇</sup>命<sup>〇</sup>には歷<sup>〇</sup>朝<sup>〇</sup>詔<sup>〇</sup>詞<sup>〇</sup>解<sup>〇</sup>これらは前にも申上げました。其外語學の書には詞の玉の緒字音假字用格歌學に石上私淑言隨筆に玉勝間など皆有益なものです。歌文集は鈴屋集といひます。歌は新古今調を喜ばれ文章は概して平易流暢です。伊勢は流石に神宮のあるところで國學の學者は前からありましたが茲に至つて宣長の様な大家が出ました。名古屋あたりの人で宣長の門に這入た人は澤山あります。横井千秋鈴木朝植松有信など皆この仲間です。又故郷松坂は紀州領でありましたから紀州侯に仕へてその後京都に出ました。京都は昔から學問の淵藪で公卿様などは古い思想を取つて物に下らぬ所であるがそれ等の人も宣長に就いて教を請うたといふので其盛んな有様が分ります。學問は最早地下に移つたのです。この京都に出た年に宣長は死にました。

宣長の弟子も中々澤山あつて語學者もあり歴史家もあり文章家もある。宣長の實子春庭は詞の八衢詞の通路を作つた語學者です。鈴木朗に

は雅語音聲考言語四種論などの著述がある。文章家では伊勢物語新釋を作つた藤井高尙松屋と稱して雅文を上手に書きました。本居の養子大平は中々の博覽家でございましてこの人が本居の家を襲ぎました。其養子が内遠内遠の實子が今の東宮侍講豊顯翁です。其外前に名前を御話した人では田中大秀長瀬眞幸春登上人など又夏目翌麿齋藤彦磨城戸千鶴など皆鈴屋門人のがらんぐであります。

伴信友  
平田篤胤

その外宣長死後の門人といはれて居る二大家がある。一人は伴信友で考證學にかけては空前の大家です。一人は神道家で平田篤胤大人。この二大人は宣長の死する年に名簿を送つて門人になつたが已に死去後であつたけれども門人の列に加はつて居るのです。以上の人には又それの弟子があつて各専門に分れて種々な研究をし種々な著書を出します。國學の盛んな事目覺しいばかりです。かやうに古學の盛になるのも一つは當時の思想の影響ですが古學の盛になつたにつれて一般精神上に及ぼした響影も亦少ない事ではありませぬ。皇室の疲弊



を擁護し、外敵の侮れぬ事を疾呼した寛政三奇士の出た時代も、丁度宣長の時代に當ります。漢學の復古説に助加され、漢學者達の自尊心を屑とせぬところから起つた國學の勢は、眞淵、宣長を経て、今は外國を相手とする様になりました。幕府の基礎を固めようとして、獎勵した學問の結果は、段々と幕府の根柢を危くします。

高田與清

立戻つて江戸の御話をすれば、其後も春海の門人清水、濱、臣、岸、本、弓、絃、高田、與、清、などは、いづれも、中古文學の研究には非常に力を盡しました。中にも高田、與、清、などは、非常に博覽な人で、著述も澤山あります。この人も松屋といひまして、今の高田早苗君のお祖父さんださうです。水戸烈公に仕へて八州文藻などを作つた人です。千蔭の門人には、大石、千、引、加、茂、季、鷹、などがあります。其外これ等の系統に屬しない人で、獨學で名をなした人も澤山あります。此方で學ひおちらで學んで、何方の門人ともいへないのも澤山あります。宣長の學説に反對した橋守部、雅言集覽の作者、石川雅望、村田丁阿、狩谷掖齋、内藤廣前、杯博覽な學者は無數にあります。後

橋守部

世になればなる程、専門に分れて、其研究も綿密になつて居ります。考證の學などは、清朝考據の學風に影響せられたと見えて、非常に進んで居ります。大部な著述杯も澤山に出來ました。文化文政天保あたり中々盛です。これは純文學にはあまり關係のない話ですが、國學の上の緊要な事

小澤蘆庵

でもあり、教育上大切な事故序ながら御話申して置きます。京都は流石に歌の本場處でございまして、本居と同時代に小澤蘆庵、梨本祐爲、杯いふ歌人が居りました。蘆庵は澄月、慈延、伴蒿、蹊と平安和歌の四天王と呼ばれた人で、す嵩蹊は文章も上手で、近世崎人傳、閑田文章杯があり、其隨筆には、閑田耕筆、次筆、杯あります。國文世々の跡の事は最初に申上げました。これらの人々いづれも、とは堂上家から歌を學んだ人です。所が、教へた堂上家の人々よりも、習つた弟子の方が、いつでもえらくなりました。歌の道も遂に地下に移つたのであります。富士谷成章などもこの仲間の人で、達者な歌よみです。この人は、語學上にもあゆみ抄か、さし抄などの著述があり、中々えらい人だと、本居翁も玉勝問の中

富士谷成章



を慷慨し、外敵の侮れぬ事を疾呼した寛政三奇士の出た時代も丁度宣長の時代に當ります。漢學の復古説に動かされ、漢學者達の自尊心を盾とせぬところから起つた國學の勢は眞淵、宣長を経て今は外國を相手とする様になりました。幕府の基礎を固めようとして獎勵した學問の結果は段々と幕府の根柢を危くします。

高田與清

立戻つて江戸の御話をすれば、其後も春海の門人清水濱、臣岸本弓絃、高田與清などはいづれも中古文學の研究には非常に力を盡しました。中にも高田與清などは非常に博覽な人で、著述も澤山あります。この人も松屋といひまして、今の高田早苗君のお祖父さんださうです。水戸烈公に仕へて八州文藻などを作つた人です。千蔭の門人には大石千引、加茂季鷹などがあります。其外これ等の系統に屬しない人で、獨學で名をなした人も澤山あります。此方で學ひあちらで學んで、何方の門人ともいへないのも澤山あります。宣長の學説に反對した橋守部雅言集覽の作者石川雅望、村田了阿、狩谷掖齋、内藤廣前、杯博覽な學者は無數にあります。後

橋守部

世になればなる程、専門に分れて、其研究も綿密になつて居ります。考證の學などは清朝考據の學風に影響せられたと見えて、非常に進んで居ります。大部な著述杯も澤山に出來ました。文化文政天保あたり中々盛です。これは純文學にはあまり關係のない話ですが、國學の上の緊要な事でもあり、教育上大切な事故序ながら御話申して置きます。

小澤蘆庵

京都は流石に歌の本場處でございまして、本居と同時代に小澤蘆庵、梨本祐爲、杯いふ歌人が居りました。蘆庵は澄月、慈延、伴蒿、蹊と平安和歌の四天王と呼ばれた人です。蒿蹊は文章も上手で、近世時人傳、閑田文章杯があり、其隨筆には閑田耕筆、次筆、杯あります。國文世々の跡の事は最初に申上げました。これらの人々いづれももとは堂上家から歌を學んだ人です。所が教へた堂上家の人々よりも習つた弟子の方がいつでもえらくなりました。歌の道も遂に地下に移つたのであります。富士谷成章などもこの仲間の人で、達者な歌よみです。この人は語學上にもあゆひ抄か、さし抄などの著述があり、中々えらい人だと本居翁も玉勝間の中

富士谷成章



香川景樹

に褒められました。其子の御杖にも色々な著述があります。京都の歌の世界はどう／＼香川景樹といふ人物を産み出しました。この人はもと因州鳥取の生れで真淵の死ぬ一年前に生れた人です。非常な俊才で十五の時に已に百首異見といふ書物を捧へました。その後香川景樹の養子となつたのです。香川家は曾祖父香川宣阿から代々の歌よみでしたが、景樹に至つて一世を風靡する勢になりました。景樹は真淵等の一派が無暗に古代に僻するを嘲つて、詞に随分新しいものを取つて調を高くせよと諭しました。それですから真淵の捧へた新學といふ歌論に反對して、新學異見を出し、古今集正義といふ註釋も作りました。歌の風調を解したと、兎に角歌の面白味が分つて居つたとは、どうしても景樹の方が上の様に思ひます。歌集は桂園一枝です。門人は熊谷直好、木下幸文、渡忠秋、八田知紀など非常に澤山ありました。この八田知紀が今の高崎正風さんの師匠で、宮中御歌所の歌風は正しく、景樹の門流を酌んだものです。この頃の公卿様で千種有功といふ人は、公卿に似合

千種有功

はぬ立派な歌よみで、やはり景樹の一流でありました。千々廻舎集といふ家集があります。夏目獭麿の子加納諸平といふ人は大平の門人でございまして、この人が著した韻玉集には色々當時の人の歌を集めてあります。

國學者が復古學を主張して和歌和文を作り古學が追々に盛になつてから一方には狂歌狂文といふものも盛に起つて來ました。之は古學の研究から古歌を知り、古文にも明るくなる。そこで歌讀が古語ばかりを取つて形も想も舊式に據らうとするから、今度は其反動で一方では何でも構はず、滑稽を主とするのです。それ故昔の古歌をいくらかも知つて、眞面目な歌を茶化して仕舞ふといふとなどが多い。昔の名句も全く滑稽にして仕舞ふのであります。徳川の文學は概して樂天的な性質がある。鎌倉の厭世的思想が失せて樂天的になつて來たのです。和歌の一反動として出た俳諧發句も最初は滑稽にばかり趨つたので、唯、芭蕉の正風躰は稍之から遠かりましたのです。狂歌狂文に至つては又滑稽を



主どしました。富貴を思ひ棄て、世を茶にして居る人も、大平に慣れて遊戯三昧に耽つて居る人も、同じく此方面に眼を向けました。句調から論ずれば狂歌は決して後世の歌ではありませぬ形に於ては成るべく古歌の形を襲ひ、古歌の形の儘で諧謔の意を寓したものです。それ故古歌を知らなければ狂歌の面白味が分りませぬ。和學の盛になつたとの一變幻であるとはこれでも分ります。狂歌の由來たる已に久しい事での、かの貞徳の淀川油糟の昔から其要素は充分に認められますが、これが氣輕な江戸つ子の手に渡つて大に發達したのです。太田蜀山狂名で四方赤良、石川雅望狂名で宿屋飯盛、皆立派な學者が作つたのです。其外朱樂菅江、鹿都部眞顔、紀定丸など、皆太平の遊民で、始終太平樂を並べて居つたのです。狂歌よみの狂名には海邊黒人、紀都丸、多田人成、智恵内子、無錢法師杯昔の人の名をもちつて付け、狂歌集には古混馬鹿集、徳和歌万載集、杯昔しの歌集名をもちつて居ります。古學流行の餘瀝であるといふとはこれでも分ります。この頃狂詩の行はれたとを御參考になれ

四方赤良  
宿屋飯盛

平澤平格

ば思半に過ぎませう。狂歌は天明年間を以て最盛の時と致します。狂文もその通りです。四方赤良の四方のあか宿屋飯盛あづまなまり、平澤平格の岡持家集、我面白などを見ればその様子が知れます。岡持家集には千蔭と應答の長歌なども載つてあります。和歌和文、狂歌、狂文入り、亂れて江戸の文壇は中々賑かになりました。

谷口蕪村

俳句の方は其後どうなつたかといふに、江戸の方では江戸座雪中庵の二つがあつて、江戸座の方では湖十、貞佐淡々などあり、雪門では吏登夢太などが居りました。其外美濃には支考の弟子が擴がり、伊勢には園女乙由などが居りました。其他諸國に名人が出て、芭蕉が正風俳諧は瞬く内に天下を風靡し、終つたのです。天明安永の頃、大阪に居つた谷口蕪村といふ人は書も上手に書いた人で、主觀を離れた書の様な發句を詠しました。俳句の上などにも進歩が認められます。正岡子規君など、日本派俳諧家が賞讃されるのはこの人です。天明以後になつても、俳人の流派は綿々として絶えませぬが、とても元祿、天明を凌駕する程には至りま



せぬ文化文政以後は俳諧の世ではありませぬ。

前にも一寸申上げた横井也右の俳文も安永天明頃のものです。也右は名古屋藩の侍で立派な身分の人です。宣長の門人横井千秋杯と縁家ださうです。浦の梅野父談など色々著述がありますが最も名高いのは鶴衣です。狂歌者が狂文のをかしみを作つたのと同様俳人で一種の風韻ある戯文を作りました。芭蕉許六などの俳文よりは一段の進歩で巧に和漢の故事を引出して通俗世間の事と結び付け意表天外より落ちるといふいふべき一種の觀察を興へたところ酒々脱々たる俳人の心の反映として如何にも面白いところがあります。つまり俳句をつなぎ合せたやうなもの俳句に對する散文でこれも一種の平民文學です。俳諧の事は小柴信一郎布川孫市二君の俳諧史傳古いもので俳家奇人談などを御参考なさい。

さて又こゝにもう一つ違つた一種の平民文學がある。それは川柳といふものです。三十一文字の和歌か盛になつて狂歌が出たのと同様十七

文字俳句の流から又一つの變態が出た。これも安永天明頃に始まりす。これを起した人は淺草の近所に居つた柄井川柳といふ人です。滑稽な點は狂歌と性質を同じくしたるところもあるがこれは其十七文字の短い處を利用して手ひどく諷刺の意を寓したものです。居候や意久地なしや無學文盲の人や嫁姑の關係などを材料に取つて即ち重もに社會上の事を材料に取つて短い句で人の心を刺る様な警句を作りました。中にも今日確言として用ひられて居るものもある位でこれも確かに機敏な江戸つ子氣質か拵へ出した一現象です。發句が短い句の中に廣漠たる天地を歌ひ込んで高遠幽妙な境遇に馳せるといふのを一轉して短い句で社會万般の人事を批評するといふ風に向いたものです。社會通俗の事を詠み入れる事は發句にもあるとで、その經過は自然な事でありませぬ。

以上述べましたもの狂歌川柳などは皆江戸に出た文學であります。江戸の文學は大體が平民的であります。村田春海村田了阿などいふ學者



も町人の子です。林、諸島は鹽瀬といふ菓子屋です。この頃の博學者、北、靜、盧などは屋根屋です。これ迄は坊主でなければ學問をしなかつたが、今、度、は、誰、でも、學、問、を、す、る、江、戸、の、町、人、は、學、問、を、す、る、餘、裕、が、あ、つ、た、に、違、ひ、な、い、之、も、太、平、か、引、續、い、て、學、問、が、大、に、擴、が、つ、た、結、果、で、す、ま、し、て、狂、歌、や、狂、句、や、小、説、な、ど、に、至、つ、て、は、士、君、子、た、る、人、々、の、興、ら、ぬ、と、こ、ろ、で、す、か、ら、丸、で、町、人、の、領、分、で、す。發、句、は、八、百、屋、魚、屋、ま、で、や、り、ま、し、た、が、小、説、家、に、も、藥、種、屋、の、亭、主、書、物、屋、の、小、僧、質、屋、板、木、屋、宿、屋、袋、物、屋、大、工、筆、工、髮、結、帯、間、な、ど、多、少、の、文、才、あ、る、も、の、は、皆、筆、を、小、説、に、染、め、ま、し、た、こ、れ、等、は、明、治、の、今、日、よ、り、も、盛、ん、な、事、で、す。

そこで小説の話にうつります。古學の復興、古書出版の結果として、徳川時代の初め、寛文から元祿、元文にかけて、小説の大阪に起つたとは前にも言ひました。安永、天明以後は、段々と江戸の文壇が賑やかになつて、文化、政、年、度、に、な、つ、て、は、江、戸、小、説、の、花、盛、に、な、り、ま、す。大、阪、で、八、文、字、屋、本、の、盛、ん、な、頃、は、江、戸、で、は、子、供、の、ち、や、に、す、る、赤、本、青、本、な、ど、が、漸、く、行

はれて居つたのです。明和頃戯文家の平賀源内、狂名を福内、鬼外といつた人が淨瑠璃を作つて見たり、滑稽小説を書き初めた時分から、そろそろ江戸小説が起つて來ます。平賀源内は眞淵翁の門に這入つた事もあるので、花柳社會の狀態を描き出した洒落本、崑崙本など唱へるものも此頃行はれましたが、これらはもとより文學上それ程の價値のないものです。併しながらこれ等が根據になつて、段々と規模も大きくなり、寫し方も精細になつて、遂には馬琴のやうな大作も出來たのです。安永、天明になつては、一般學問の進歩につれて、世の中が段々と支那小説を讀む様になつて、三國史や水滸傳の俗譯されたものも色々出ました。安永二年に出た建部綾足の本朝水滸傳などが其初めです。綾足も眞淵の學說を聞いた人で、片歌といふものを主張した人です。立派な國學者です。國學の盛になつてから、中古跡の文を作つた小説などもこの後段々出來ます。綾足の西山物語、村田春海の竺志船物語、石川雅望の志みのすみか物語などこの部類です。大阪の方でも上田秋成などいふ國學者が雨



月物語などを拵へました。この人も立派な國學者で、加藤宇万伎の門人、その宇万伎は眞淵翁の門人で、城番になつて大阪へ行つて居りましたから、秋成はそれから教授を受けたのであります。眞淵が國學を起した影響は國學ばかりには止まりませぬ。

この頃の戯作者は大體は放蕩無頼な人が多く、其小説にも淫猥なものが多かつたのですが、曲亭馬琴に至つては、小説の品位も高まり、教訓を主とするものになりました。馬琴などの作つた小説を読み、本といひます。馬琴の一時師と仰いだのが、山東京傳。この人もはじめは袋物畑管などを商つて居つた人で、若い内はやはり放埒な人でした。若い頃に作つたものは、大抵猥褻な洒落本です。寛政三年かの松平越中守の大改革によつて、一切そんなものを禁ずるとになつて、京傳も罰を受けましてからは、大變に後悔して、前の様な猥褻な物は作らさず、教訓を主とした讀み本の方に心を向けました。忠義水滸傳、櫻姫全傳、曙草紙、昔語稻妻表紙、本朝醉菩提など、皆晩年の作です。讀み本の作者としても、より馬琴の先

山東京傳

輩であります。京傳は後に馬琴と中が悪くなつて絶交したのです。

馬琴は子供の時から文才があつた人です。最初京傳の門人になつて、京傳の爲めに其書物の代作をしたと杯もありました。廿七歳の時、飯田町の下駄屋の入婿となつた。最初の内はつまらぬ草双紙などを出版しましたが、寛政の改革で京傳が刑に觸れて元氣のなくなつた後は、馬琴の名が段々と知れて、文化元年には、月氷奇縁といふ讀本を書きました。馬琴の讀本著作の重なるものは、皆文化以後のもので、す。著作は八犬傳、弓張月を初として、頼豪阿闍梨、怪鼠傳、俊寛僧都、島物語、青砥藤綱、稜案、近世説、美少年録、俠客傳、句殿實々記、松染情史、秋七草、昔語八丈綺談など、數百種に上りました。馬琴が初作の寛政から死んだ年の嘉永元年迄、六十年間は殆ど一日も筆を擱かなかつたといふ程です。徳川時代は二百六十年、其五分の一は馬琴が小説を書いた時代です。元祿の近松門左衛門と相對して、徳川文學の花であります。これ迄は小説を書く人には、學問のある人は少なかつたが、馬琴は儒老の學から和書に至るまで悉く目

池澤馬琴



二四四

を通して歴史にも地理にも明るかつた其學才を以て筆を取りましたから規模の大きな文章の力のあると外の人とは比べものになりませぬ。上田秋成の様な和學者の文章に私淑したところも見えて雨月物語の中の材料などが、弓張月、俠客傳などの中に這入つて居るところも見える。又かの御伽草子などの材料を敷衍したものなども澤山ある。支那の小説を翻譯するとも得意です。八犬傳などは大體は全く水滸傳の脚色から思ひ寄つたもので、綾足以來行はれた水滸傳がこゝに至つて全く同化されたのです。源氏物語が中古の物語の精英を集めて出来た様に從來發達して來た種々な小説は皆馬琴の材料となり、馬琴に至つて盛大な觀を呈しました。從來の小説家には大部な著述は少ない。馬琴のは皆な大きな規模で、俠客傳、巡島記の様なものは未完のもので、八犬傳は二十八年間もかゝつて、やう／＼全備したと申します。八犬傳が水滸傳を翻譯したとは前にもいふ通りですが、水滸傳は泥棒の寄合です。馬琴の八犬傳では仁義禮智忠信孝悌といふ儒教の徳が直に人間と

なつて現はれて出ました。それ故馬琴の小説中にある人物は、尤で神様の様な人が多い。道の通り踏んでゆく少しも缺點のない人ばかりです。近松の戯曲は道義と情慾との喧嘩で、忠孝といふ考はありながら、情の爲めに知らず／＼道に外れた事に陥る。それを又道理で抑へようとする。そこで二つが衝突して死んで仕舞はなければならぬ様になる。馬琴のはそうでない。社會を寫し、人間を寫すといふところから見れば、近松の方が勿論自然に近いのです。唯た仁義の一本鎗で押通すのが馬琴です。これは徳川の政教主義が正しく表彰されたもので、一方に於て餘り猥褻な小説が行はれた反動であります。かの男女の情死も近松の筆に上ればどこ迄も匹夫匹婦の情死ですが、馬琴はすべてこれに歴史的の根據を持たせる。俊傳兵衛が旬殿實々記となり、三勝半七が南柯夢となり、駒才三が八丈綺談となり、染久松が松染情史となる。染久松は楠公の子孫になつて仕舞ひました。こんな鹽梅に世間にあつた情話にも必ず歴史上の事をあてはめて、主君や親や夫の爲めに忠義を



盡し、苦節を守る様に作りかへたのが、馬琴の讀本です。それで以て小説は全く勸懲主義のものとなつて教訓的のものとなりました。小説といは士君子の家庭には道入らぬものとなつて居つたものが、これからは如何なる社會の人にも讀まれる様になりました。その賣れ方の多かつたのも無理はありませぬ。馬琴に至つて貴族的文學と平民文學とか幾分が調和しかつて來たのであります。

馬琴などの時代に並木五瓶、鶴屋南北といふ脚本の書手が出ました。脚本はもと芝居の臺帳で、後者の手控にしたものださうですが、これは全く曲中の人物の對話のみで成立つもので、西洋のどらまといふものに相當するものであります。本當の戯曲詩であります。惜しい事には後者に使はれる様な風になつて居つて、學問のある人が筆を染めなかつた事があります。

文化文政の盛んな時代に現はれた小説家は中々澤山ありますが三馬、一九、春水など一派の文學を開いた人々について一言しませう。一九は

東海道中膝栗毛といふ滑稽小説に大當りを取つた人です。之をよんで見れば如何にも徳川時代の逸民の有様がよく分ります。鎌倉頃の紀行文に比べれば雲泥の差があるとも認められます。參觀交代で五十三次を練つてあるいた此頃の時代、この書物の喝采を博したのも當然の事です。三馬は小供の時、本屋の小僧になつて、十四五歳の頃にははや大抵の小説類は讀み盡したといひます。洒落本なども澤山書きました。最も長じたのは滑稽本です。浮世床、浮世風呂などが其傑作です。感心な事には其滑稽は猥褻な事で落ちを取らない事です。其滑稽の機轉頓智は實に及び難いどころがあります。狂歌や戯文や、狂句の滑稽はこゝに至つて發して滑稽小説に發達しました。水谷不倒君の説に、三馬は風來山人の系統を引いて居るといはれて居ります。さうでございませう。

爲永春水は三馬の門人です。初めは三驚亭と名乗つたのです。眇目の男だつといふ事です。これがかの人情本といふものを創めたした洒落本が猥褻だと禁ぜられてから、一時は讀本の世の中となりましたが、一般



の嗜好は中々法令などで抑へられるものではありませぬ。讀本は書いてある事柄も文章もむづかしい。教育の無い階級はどうしても春水の様な作者を渴望します。春水はこの機に乗じて、人情本を作り出して成功を得ました。これ迄の洒落本は多くは花柳社會の物を材料に取りましたが、今度は又、其外に町人の息子、息女など、素人を材料に取つて書きました。中には伊呂波文庫の様なものもありますが、大體は猥雑なものです。其結果が當時の風俗を紊したとは無論多かつたに違ありませぬ。水野越前守の天保の政事になつて、春水もどうも所帯を蒙りました。この人情本は對話風に書いたもので、西洋でいふ人情小説、ノヴェルに似て居る所があります。坪内雄藏君が著された小説神髓では、馬琴などの勸懲小説を排斥して、大層春水などを褒められました。兎に角一派を開いた人として記憶しなければなりません。

この外に柳亭種彦といふ小説家もあります。これは合巻物といふ繪草子本を作つて、名を取つた人であり、就中名高いのが田舎源氏です。

柳亭種彦

源氏物語を翻案して、足利時代の事に作りかへて、公方家の榮華の様を寫しました。所がこれは幕府の内部を書いたのだといふ嫌疑を蒙りましたから、心配して間もなく病死しました。種彦は幕府の侍であつたのです。性質多藝な人で、俳句も出来れば、狂歌も出来る。役者の躍も出来るといふ人でありました。三河武士の末は、徳川の末年皆こんな風になつたのであります。

以上申上げた様な小説家は、どれも江戸の人です。京傳、馬琴、三馬、一、九、皆江戸つ子です。京大阪の方にも少しはありましたが、目立つ程の人がありません。

小説については新しいもので、關根正直君の小説史稿、雙木園主人の戯曲小説通志、坪内逍遙水谷不倒二君の列傳、小説史などを御覽なさい。其他諸雜誌にも色々な論文がありませう。内藤耻叟翁の出版された温知叢書の中などにも色々なものがあります。

徳川三百年は誠に文學の隆盛の時代、漢學國學の盛になつたのが根本



になつて戯曲小説などの華文が大に榮えました。これが我が明治文學の基礎になるのであります。内藤湖南君の近世文學史論、徳川の文學を論じたものです。

### 第十講 現代文學——結論

徳川幕府が學問を奨励した結果、大義名分の論が段々とやかましくなつた。そこへ黒船の騒ぎが始まつて、尊皇論がいよいよ持ち上り、さしも堅牢に組織された徳川の幕府も一朝にして瓦解しました。正面から幕府を攻撃したのは、儒者や國學者の忠孝論、國粹論、内部からが旗本の性根を腐らせたのは、洒落本や人情本なども與つて力がありました。徳川の幕府は文學を以て起つて、文學を以て亡んだやうなものです。さて、大政一新して明治の大御世となつては、これ迄の攘夷論はどこへやらいつて、西洋諸國との交通貿易、何もかも西洋の主義を入れました。この御一新は王政の復古で、官制の組織などは一旦は昔の大寶令の制度に法りました。だが、底の方の潮流は全くの西洋主義です。西洋と東洋との接近したのは、戦國末からで、例のイエズイット宗の布教が徳川氏以前には中々盛んであつたのです。寛文の頃已に伊蘇普物語の翻譯があつ



たのを見ても西洋の影響が認められます。天草の亂以後この宗旨が嚴禁され、こちらから出掛ける事も禁ぜられましたから、徳川二百餘年の間、暫くは大平の夢を食つたのであります。併しながら和蘭との商賣は幕府からも許されて居つて、西洋の文物が遣入つて來るとは時として絶えなかつた。徳川中興の英主八代將軍吉宗の頃などには、理學も開け物産の學も起つて、蘭學をする人も段々と出て來たのです。平賀源内の淨瑠璃、神靈矢口の渡の文句には、<sup>エ</sup>「オレキテル」の語が見えて居ります。馬琴の著述にある夢想兵衛蝴蝶物語は、その頃世に行はれた和莊兵衛に本づいたものですが、この和莊兵衛は莊子の寓言に託したものに違ひないが、大躰の趣向は「カリヴァー」の旅行記から思ひ付いたのだらうといはれて居ります。密者や窮理學者が蘭學をやり始めたのが本元で西洋の思想は段々と廣がつて來ます。明治以後の思潮の變化はもとより一朝一夕の事ではありませぬ。

大權返上に續いて、廢藩置縣、帯刀は禁止される。曆は改まる。教育の制度

は凡て一變する。電信が加ふる。鐵道が敷かれる。社會の有様はすつかりと其面目を一新しました。文明の利器は出來るだけ國中に輸入された。これ程の急激な變化、これ程の長足な進歩は、どこの國、どこの世にもない。西洋人などはあきれて居る。けれどもこれは決して驚くには足らぬ。西洋人の驚くのは日本國を野蠻國の様に思ふからである。三千年以來、文學の燦然として輝いて居つた國、印度の宗教、支那の道義、東洋文明の精華を盡く集めて居るこの日本國、三百年以來、西洋の文明もそろそろと遣入つて居つた日本國には、近來二三十年間の進歩はもとより當然の事であり、併しながらこの二三十年は、正しく東西文明の混雜紛亂してまだ調和を得ない時代、社會變動の時期であり、まして、何事も固まらぬ有様です。右を見れば昔の大名屋敷の長屋門が聳えて居り、左を見れば煉瓦作りの高い塔が聳えて居る。本願寺の殿堂も見えれば、ニコライの塔も見える。和洋折衷作りの建物もちらほら見えるのが、今日の建築の上の有様です。街道を行く人も、洋服を着て居る人、和服を着



て居る人洋服を着て下駄をはいて居る人法被を着て草鞋をはいて居る人種々雑多千態万狀これが今日の社會の風俗です。緒論にも申上げた通り文學美術は實に社會の反映、人心の鏡でございませう。平安朝の殿堂を見れば平安朝の世の様が何となく面影に浮んでくる。明治の文學美術の面影はまさに唯今の社會の有様を御觀察になれば分るのであります。一言で申上げれば唯今の世はまだ試験の世の中でございませう。徳川の世が始まつてから元祿時代の盛時が来るまでは百年に近かつた維新以來の三十年ではまだ明治の元祿時代にはなりません。

維新の初には西洋の事情を知るのが何よりの急務で、古いものは何んでも棄て、仕舞へといふ時代でございませう。奈良の興福寺の五重の塔なども邪魔だから焼拂つて仕舞ふといふ相談があつたと聞きました。古い書物や古い繪や古い道具何でも二束三文に賣拂ふといふ次第でございませう。この時代にあつて福澤先生は通俗平易な文章で新しい學問新しい智識を國民一般に布かれました。西洋事情や万国國盡や智

福澤先生

新聞紙

環啓蒙學問のすゝめなど、どの位この頃の人の爲になりましたらう。今日の支那は福澤先生の様な先達者の欲しい時代です。福澤先生の著書は思想に於て新しいのみならず文章に於ては思ひきつて平語をつかひ、通俗を旨とせられ、自然と一昧を形作つて居ります。徳川の世には心學といふ通俗な教があつて、儒者のむづかしくいふ道義を平易に一般の男女に説きました。福澤先生はこんな風に西洋の事情を紹介せられたのです。先生の慶應義塾で養成せられた人々が朝野の間に重きをなして、明治の文明を進めた功勞は、もとよりいふ迄もない事です。明治の文學が発達するのについて、大きな機關となつたのは新聞紙の發行であります。新聞の始まりは元治元年の頃だと聞きました。新聞らしい新聞は今の東京日日新聞などが最も古いので、これは明治五年頃出ました。續いて報知朝野讀賣などが發刊せられた。福澤先生の時事新報はずつと後の事でありませう。かやうな新聞紙は國內の出來事を報じ、西洋の事業を紹介し、政治上の議論もし、文學上の記事もありました。



新聞文學者

から明治の文藝は自から其上に極りました福地櫻痴成島柳北などの諸先覺が健筆を振つて全盛であつたのは明治十年前後の事かと思ひます。これ實に活字印刷の便利を得たからで雑誌も之に伴うて起つて参ります。明六雜誌、共存雜誌、近事評論などは、いづれも明治の先覺者の思想を集めたものです。明治の論文體は先づは漢文を直譯したもので、福澤先生の様な通俗體も幾分か其中に加つて來ました。明治になつてばつたりやんだのは、草双子、人情本の印行です。徳川の世から引續いて残つて居つた小説家などは新聞紙の一面を借りて、其小説を公にしました。假名垣魯文などいふ人は一九の膝栗毛について、西洋道中膝栗毛などを著し、多少新機軸も出した様ですが、何時頃死なれたのか私には知りませぬ。

日々進んで行く明治の文學界は、これ等の人を顧みなくなつた。明治の文學はやはり新思想をもつて居る人に動かされねばなりません。故新思想を振ひ、新文體を書いて居る新聞記者が、勢文學に於ても先達

坪内逍遙

者となりました。福澤門下から出た矢野龍溪の經國美談などはその一例でございます。始めて英吉利の小説家リットンの「マルトラザアース」を翻譯して花柳餘情として出されたのは明治十二年譯者は織田純一郎君です。この人も新聞記者の様に思ひます。藤田鳴鶴の繫思談もリットンの翻譯ついでに末廣鐵腸居士の雪中梅柴東海散士の佳人之奇遇などはいづれも政事小説です。田口卯吉君の日本開化小史は明治十一年に出たものです。藤田鳴鶴の文明、東漸史、島田三郎君の開國始末などは歴史の方面で、これ等は稍や後れます。とにかく一方では政事家であり、一方では文學者でございました。同じ記者の中でも森田思軒の様な人は文學の方に餘計傾いて居りました。替使者などがその傑作でせう。ユーゴーの翻譯なども多く出されました。

大學の卒業生は理學、醫學の方は明治九年頃からありますが、文學部の卒業生は明治十三年が初めです。その頃の文學部はやはり政治科と結付いたものでありました。この大學の出身者で坪内雄藏君が始めて純



粹な文學者として現はれ出られた同君の著された小説神髓には文學の種類を評論せられ馬琴などの勸懲主義を排斥して自分でも書生氣質妹と背鏡などを出版されましたこれ我明治文學の一新紀元といつて宜からうと思ひますこれ迄は小説家といへば概して品位の劣つたものであつたがこゝに至つては立派な紳士學士たる人か筆を取られたまかも新聞などの片手間ではなくして文學の専門家であります一方に於てはシエキスピアの戯曲該撒を翻譯されながら一方に於ては徳川文學を深く研究されて其長所を採られた此頃同君の風を聞いて起つたものは少くないと思ひます尾崎紅葉山田美妙齋など硯友社を組織したのも此頃でせう幸田露伴なども此頃からそろ／＼書き始められたのでせう

小説

明治二十年以後の小説界は非常に繁昌して來ました新聞も小説を載せるといよ／＼多く雑誌も小説専門のものが追々出ました紅葉露伴美妙齋などの傑作はこの頃出ました新作家も多く出て來ましたがと

にかく以上の三君が大立物です明治廿三年坪内君早稻田専門學校の文學部を起されてから不倒宙外など門下から出た有望な秀才も少からぬ事であります女流では二三年前に死んで樋口一葉女史得難い才筆でありました硯友社の仲間で巖谷漣山人が御伽噺の方へ向はれたも注意すべき事です

新體詩

大學の外山矢田部井上の三先生が新體詩抄を發刊されたのは明治十四年であります之は今迄の三十一字や十七文字の短い形に満足しないで西詩の長所を輸入しようといふ企であります新體詩抄には西詩の翻譯が重もになつて居つた様ですか新作もありましたとにかく國歌改良の先登者であります外山先生は其後時々作られ明治卅年には中村坂上田の諸君と再び新體詩歌集を出版されました井上先生の風土記から出た比沼山歌は其後音沙汰が無い様ですこの新體詩の方面にも近來は羽衣藤村晚翠など色々な作者が現はれて次第次第に進歩の傾向が見えます中村坂上の二君が御歌所寄人となられたのは新體詩



俳句

人としての思召なりと承りましたが、如何でせうか。和歌は上古から今日迄相變らず、其生命を保つて居ります。今後もどこ迄續きませうか、之を學ぶ人は年々に多くなるさうですが、今日迄はただ格別な改革も起らぬ様です。俳句は正岡子規が新躰俳句を唱へて天明時代を賞め立て、居ります。儘に俳句の再興者たる名譽はあります。惜しい事には唯今は重忠に罹つて居ります。戯曲の方面も新主義から手を着けられた。演劇改良といふ事は明治十七八年頃からありましたらう。新作の脚本もぼつ／＼出ましたが、あまり成功もしなかつた様です。近年福地櫻痴居士は歌舞伎座の爲に筆を採つて近松などの舊作を改削したり又新しい曲なども作られる。坪内逍遙の牧の方、桐一葉など近頃になつて現はれた。これも徳川時代とは違つて學者の蓄くこととなり、尙又新主義を容れて改良して行くとは事實です。併しながら其進歩はあまり著しくありません。これは見物の方の改良も早く行はれねばなりません。

新しい散文家としては徳富蘇峯、陸羯南、三宅雪嶺、朝比奈、碌堂等も記憶せられねばなりません。

明治の三十年間新しい文學の現象は、概略はこんな物でせう。これは現今日擧げて居る事で誰にでも分つて居る。とにかくこの卅年間西洋の文學の影響は、非常に著はれて居ります。大體の氣運を申せば明治十四五年迄は頻りにあせつて西洋を模倣した時代、スペンサーなどの進化論の盛んな時代です。十四五年頃からそろ／＼自國を顧みた時代で、近藤瓶城君の史籍集覽、風文館の資治通鑑佩文韻府等の出版、稗史出版社の八犬傳、弓張月などの翻刻に稍や復古の氣運が見えます。古典科の置かれたのもこの時代、フェノロサ氏が日本美術の價値を唱へたのもこの時代です。明治十八年頃伊藤侯の西洋主義が一時行はれた反動として明治廿二三年頃以後國家主義がいよ／＼盛になつて國學院も出来る。日本文學全書も出来る。獨逸の學風は學問界全體を風靡して來ました。森鷗外の柵草子も明治廿二三年の頃に盛で文學批評の論も次第に



始まりました。早稲田文學も出来る。少し後れて帝國文學も出来ました。博文館などは日本文學全書引續いて歌學全書其他中古近古近世の文學書類を絶えず翻刻して居ります。今の世を徳川に例へて申さうなら先づ寛文あたりの時代です。古文學が稍や復興して眞面目に研究せられかゝつた時代です。前の時代の本を頻りに出版して居る時代です。明治の元祿時代はもう少し後れて來さうであります。今ははや社會上一般の改革も行はれました。立憲政體四民平等の世の中になりました。昔しの封建時代の貴族文學も平民文學も混和して明治の國民を代表する國民文學の鼓吹せられる時期になりました。さても將來の大散文家大詩人はどこに潜んで居るとやら。今頃は幼稚園で犬や猫の畫でも書いて遊んで居るのでせう。

先づ大躰はこんな事で済みました。上下三千年の歴史を十日間でやつて仕舞ひました。一日にさつと三百年殊に大急ぎの旅行です。途中で色

色忘れ物もした様に思ひます。ふり返つて見れば我日本の國は流石に東洋の一古國であります。文學の光は西の方歐羅巴のまだ眞暗闇の時分から輝いて居ります。神話から國史の始まつた我國民は神話にまつた歌謡を今日迄傳へて居ります。何事もまだ簡易な世の中に美しい祭祀の詞を唱へて居りました。紀元九百年代支那の儒教が傳はり千三百代印度の佛教が傳はつてからは東洋の文明は全く我國の中に流れ込んだ。そこで純粹な日本思想にこの儒教や佛教の思想が雜り合つて後の世の文化は皆その結合から湧いて來ます。儒教も佛教も漢語で書いてあるが爲めに漢學の攻究といふところが智識の本源になりましたが國民特有の文學は之と共に絶えず活動して居ります。奈良朝の和歌平安朝の物語近古になつての戦記物語謡曲文學は大宮人から段々地下に移つて女文は遂に男文と合同しました。徳川の盛な世になつては古文の復興と共に新しい平民文學も出來て明治文學の根柢はこゝに成熟しました。歴代各種の文學は各其時世の有様を反映して今日に至



るまで、まだ生きて居ります。柿本人丸や紀貫之や紫式部や清少納言や、近松門左衛門や曲亭馬琴や、歴代の文學者は決してまだ死んだのではありませぬ。その書残した歌や文は國語のあらん限り生命を保つて、つ迄も人の心を動かし、いつ迄も後の文學に影響を與へます。歴代の文學は實に國民の文化の花で、國民の寶であります。我々が三千年前傳來したこの寶をもつて居るとは、東洋の古國たる證據で、鼻の高い次第であります。

さりながら一方に於て西洋文學の盛な有様を見ますと、又多少の感慨を生じねばなりません。歐羅巴各國の開化は割合に遅かつたのに、其進歩は誠に著しい。我國歴代の文學は如何にも豊富ではあります。及ばぬところも勿論澤山あります。深遠高大な思想を歌つた詩篇や國民の代表すべき立派な戯曲などはまだ我々はもつて居りませぬ。國歌の如きは唯だ花を活けたり、香を拵つたりする遊と大差のないものです。雄大な國民としては必ず雄大な國文學を持たねばなりません。昔し支那

と交通し始めてからは儒佛の影響に依て文學の發達を助けたと些少ではありませぬ。今後の國文學は歐羅巴文學の長所乃至は亞米利加でも亞弗利加でも世界の文學の長所を取つて一層雄大に且高尙にならせなければなりません。言ふ迄もなく、將來の文學は古代を根柢としなければなりません。古文學の糟粕を嘗めるだけでは到底だめです。これは文學ばかりではありませぬ。音樂でも、繪畫でも、建築でも、あらゆる美術の方面は東西文明の調和を求め、時代であります。東西文明の調和といふとは日本人の爲すべき事業であります。西洋人が東洋の文化を消化するのは中々急には出来ずまい。二千年前の昔から東洋文明の精粹を集め、三百年來そろそろ西洋文明を吸収して居つた日本人が西洋文明を咀み砕くとはいへない。其までの難事ではありませぬ。この天職は日本人の頭の上に懸つて居るのであります。洵に多望な國民といはねばなりません。

今日の文學者、美術家は非常な熱心を以て西洋の新元素を吸入して居



ります。それと同時に歴代の文學、美術も盛に研究せられる様になりました。幼稚な翻譯時代は已に過ぎて、稍や翻案の時代に還入りました。併しながら翻譯もまだ棄てる時代ではありませぬ。立派な翻譯は立派な國文學です。將に來らんとする花やかな時代は先にも申しました通り最早段々近づいて居ります。

この位でやめませう。洵につまらぬ講義で、諸君には何等の御利益も無かつたらうと御氣の毒に存じます。併しなから諸君のやうに教育に従事なさる御方が國文學の變遷を御研究に成るとは、私共の最も希望する所でありませぬ。願はくはこんなつまらぬ講義を御靜聽下さいました。御熱心を以て尙飽までも文學史を研究せられんことを希望いたします。今日學校などで教へる國文讀本にも上古中古、近古にわたつて種々な文章が抜いてあります。それらは皆適當な物でせうか。從來の國學者のやうに國文といへば中古文に限つて宜いか、又は今迄打棄て、おいて謠曲や俳句や小説の中にも随分取つていゝ物はないか、學校の唱歌に

はどんな物がよいか、韻文はどの邊から教へてよいか、それには歌がよいか、謠曲なよいか、今様がよいか、將來國民に教へる文牀はどんな物がよいか、思想の上は如何なる點を探るべきか、いふ迄もない事ですが、國民教育の根本は國語であります。その國語教育といふ事を考へるには文學史上の智識が無くつて出來ませうか、國語教授の方針もまだ一定して居らぬ今日、諸君の力を待つとは最も多い事でせう。終りに臨んで極暑の時節、柄永い間諸君の靜聽を煩したのを謹謝し、併せて國家の爲めに御自愛あらんとを希ひます。

## 國文學史十講 終



索引

アガタ井モンシ	縣居門人	三六	イセモノガタリ	伊勢物語	三八
アサ井レウイ	淺井了意	三三	イチデウカチラ	一條兼良	二八
アシカマフンガク	足利文學	三三	イツノコトワキ	稜威言別	三六
アスカ井マサヨ	飛鳥井雅世	二五	イツミシキアニツキ	和泉式部日記	三三
アンカモン井ンシデ	安嘉門院四條 (阿佛尼)	二五	イトウシンサイ	伊藤仁齋	二六
アラキダヒサオユ	荒木田久老	三三	イヌツクバシフ	犬筑波集	一五
アラ井ハクセキ	新井白石	一九	イマヤウ	今様	二五、二七
アリテレーシヨ		三	ウタアクロ	歌袋	二六
アリハラノナリホラ	在原業平	八	ウヂシフデフ	宇治十帖	二二
イクノモクツ	池の藻屑	一四	ウヂシフ井モノガタ	宇治拾遺物語	二九
イサヨヒニキ	十六夜日記	一五	ウチヤママタツ	内山真龍	六七、三八
イシカハノイラツメ	石川郎女	五	ウツボモノガタリ	空穂物語	一五
			ウヅラゴロモ	編衣	三六
			ウラベノケンカウ	卜部兼好	二四

索引



エイクワモノガクリ	榮花物語	一三三	カウシヨクボン	好色本	二四
エジマキセキ	江島其碓	三三五	カガハカゲキ	香川景樹	九七九 九三三
オクノホソミチ	奥の細道	二二	カキノモトノヒトマ	柿本人麿	四七五
オチクボモノガタリ	落窪物語	二〇四	カグラウタ	神樂歌	七
オトギザウシ	御伽草子	一八〇 二五	カゲロフニツキ	蜻蛉日記	一三三
オホイシチヒキ	大石千引	二二五	カサノカナムラ	笠金村	五
オホカバミ	大鏡	一三四	カダアヅマロ	荷田春満	八四 三〇三
オホシカフチノミツ	凡河内躬恒	八九	カタウタ	片歌	三四 四一
オホトモノノロマシ	大友黒主	八三	カトリナヒコ	楫取魚彦	三三八
オホトモノヤカモチ	大伴家持	六〇 五	カナサンフセウ	假名三部抄	一五〇
オホナカトミノヨシ	大中臣能宣	九	カヒバラエキケン	貝原益軒	一九
オホハラヒノコトベ	大祓祠	四〇	カマクラファンカク	鎌倉文學	一三三
カイカウ	歌意考	一六三	カモスエタカ	加茂季鷹	五
カイダウキ	海道記	一四	カモチマサズミ	鹿持雅澄	五

カモチヤウメイ	鴨長明	一四	キヤウカ	狂歌	三五
カモマフチ	加茂真淵	九六 三六	キヤウゲン	狂言	一七
カラネセンリウ	柄井川柳	三三	キヤウゲンキ	狂言記	一七
キキノウタ	紀記の歌	元	キヤウブン	狂言文	三三
ギケイキ	義經紀	一六	キヤクホン	脚本	三六
キシモトユヅル	岸本弓弦	九三 三三	ギヨクエウシフ	玉葉集	一五
キシエンホフシ	喜撰法師	八	キヨクテイバキン	曲亭馬琴	三三
キタムラキギン	北村季吟	一六 八四 九二 四	キヨハラノモトスケ	清原元輔	九
キノカイオン	紀海音	九	クニツブミヨノア	國つ文世々の跡	三
キノツラユキ	紀貫之	九	クマガヤナホヨシ	熊谷直好	八
キノトキフミ	紀時文	九	クンキモノガタリ	軍記物語	一五
キノトモノリ	紀友則	九	クワイフウソウ	懷風藻	四 五
キンエンシフ	金葉集	一三	クワザンテンワウ	花山天皇	一〇〇
キンピラボン	金平本	三七	クワンタンセウ	觀短抄	一五

索引

三



クワンテンセウセツ	勸懲小説	三〇	コノチヨモンシフ	古今著聞集	一〇
クワテウヨシヤウ	花鳥餘情	一九	コヲキ	古事記	五
クイコクシフ	經國集	六	ゴシフサシフ	後拾遺集	三六、三七
クイチウ	契沖	二〇、二五	ゴセンシフ	後撰集	九
クイエンイツシ	桂園一枝	三三	コツケイセウセツ	滑稽小説	二〇
ゲンシモノガタリ	源氏物語	二〇、二六	ゴトバテンノウ	後鳥羽天皇	一五〇
ゲンチユウシフ	源註拾遺	二九	コンシヤクモノガタ	今昔物語	二五
ゲンヘイセイスイフキ	源平盛衰記	二五	サイギヤウホフシ	西行法師	一四
ユウガンセウ	厚顔抄	六	サイトウヒコマロ	齋藤彦麿	五
コキンシフ	古今集	八、九、一〇	サイバラウタ	催馬樂歌	七
コクカハチロン	國家八論	一三	サカノウヘノモチキ	坂上望城	九
コクブンガク	國文學史ノ目的	七	サゴロモ	狹衣	一〇
コゲツセウ	湖月抄	二九	サトミハツケンデン	里見八犬傳	二四

四

サントウキヤウデン	山東京傳	三三	シンセンザイシフ	新千載集	一五
サルガク	猿樂	一六	シンゾクコキンシフ	新續古今集	一五
シキテイサンベ	式亭三馬	二〇	シンタイシ	新躰詩	一五
シクワシフ	詞花集	一七	シンツクバシフ	新筑波集	一八
ツツキンセウ	十訓抄	一〇	シンブンシ	新聞紙	二五
シフニダンサウシ	十二段草子	二六	シモカウベナガル	下河邊長流	六三、一〇一
シフサシフ	拾遺集	一〇	シヤウフウタイ	正風躰	二五
シミヅハマオミ	清水源臣	五	シヤウルリ	淨瑠璃	二九
シンエフシフ	新葉集	一六	シヤセキシフ	沙石集	一〇
シラウシヤウト	神皇正統記	二四	シヤレボン	洒落本	二四
ウキ	ウキ	二四	シユントウ	春登	二四
シンコキンシフ	新古今集	一五、一六	シユントクテンノウ	順徳天皇	一五〇
シンゴシウサシフ	新後拾遺集	一五	スズノヤモンシフ	鈴屋門人	二〇
シンゴゼンシフ	新後撰集	一五	スミヨシモノガタリ	住吉物語	一四
シンシフサシフ	新拾遺集	一五			

索引

五



ス井ケンセウ	水	源抄	一四	ゾクゴセンシフ	續後撰集	一五
セイセウナゴン	清少納言	三三	ゾクシクワシフ	續詞花集	二七	
セウセツ	小	説	二〇三〇	ダイニンサンミ	大貳三位	二〇
セドウカ	旋頭歌	四六	タイヘイキ	大平記	一六	
ゼンア	善	阿	一八四	タカダトモキヨ	高田與清	八三
ゼンガク	仙	覺	六	タクダイヅモ	竹田出雲	三四
センザイシフ	千載集	二七	タクトリモノガタリ	竹取物語	八五	
センシフセウ	撰集抄	一四	タクベアヤタリ	建部綾足	二四	
ゼンミ	禪	味	一四三〇	タクモトギダイフ	竹本義太夫	三七
センミヤウ	宣	命	六	タマナレイ	多田南嶺	三六
センリウ	川	柳	三九	タチバナノチカケ	橘千蔭	三六
ソウヤウヘンシヨ	僧正遍照	八三	タチバナノナリスエ	橘成季	一〇	
ウ	曾我物語	一七	タチバナノモリベ	橘守部	八〇、九〇、三三	
ゾクシフ非シフ	續拾遺集	一五	タナカオホヒデ	田中大秀	八七、三二	

タニクチアソソ	谷口蕪村	三七	トクガハブソガク	徳川文學	三、一七
ダンリンハ	檀林派	二五、三〇、三七	トサニキ	土佐日記	七、一〇
タメナガシユニス非	爲永春水	三〇	トダモス非	戸田茂暉	二〇
チカマツハンソ	近松半二	三二	トリカヘバヤモノガ	取替波也物語	一〇
チカマツモンザエモ	近松門左衛門	二六	ナガウタ	長歌	一五
チグサアリコト	千種有功	三三	ナカエトウシユ	中江藤樹	一五
ツイク	對句	三	ナガセマサチ	長瀬真幸	一五
ツキノユクヘ	月の行方	一〇	ナカヤマウマシ	中山美石	一〇
ツクバシフ	筑波集	一八	ニシザハイツブウ	西澤一風	三五
ツチミカドテンワウ	土御門天皇	一五	ニシファイチダイシフ	西澤一代集	一五
ツボウチセウエウ	坪内逍遙	三六、三〇	ニシヤマソウイン	西山宗因	二〇
ツレヅレグサ	徒然草	一〇	ニヒマナヒ	新學異見	一六
デンガク	田樂	一六	ニヒマナヒイケン	新學異見	一六、三三
トウクワンキカウ	東關紀行	一〇	ニンヤウボン	人情本	二八



ノリト	祝	詞	三、五、九
ハイカダイクイヅ	俳家大系圖		三二
ハイブン	俳	文	二、三、三六
ハウヂヤウキ	方丈記		一四二
ハウモツシフ	寶物集		一四九
ベセテ	芭蕉	蕉	三四、三〇
ハチダイシフ	八代集		一三七
ハチダイシフセウ	八代集抄		一〇三
ハチモンヤヤセウ	八文字屋自笑		二〇五
バンカウケイ	伴蒿蹊		二二三
ハンカンブ	藩翰譜		二〇〇
バンノフトモ	伴信友		一三三、三三一、三三二
ハヤシラザン	林羅山		一八八
ヒユ	譬喻		三三三、三三三、九〇、二六
ヒラタアツタネ	平田篤胤		三三
ヒラサハヘイカク	平澤平格		三三七
フウガシフ	風雅集		一五五
フクザハエキチ	福澤諭吉		三五四
フクチアウチ	福地櫻痴		三五六、三六〇
フクロザウシ	袋草紙		一七、一七九
フシタニシゲアヤ	富士谷成章		三三三
フシタニミツエ	富士谷御杖		三三六、三六九
フシハラノアキスケ	藤原顯輔		一三六
フシハラノイヘタカ	藤原家隆		一五二
(カリウ)			
フシハラノキヨスケ	藤原清輔		一三七
フシハラノサダイヘ	藤原定家		一五、一五九
(テイカ)			
フシハラノセイクラ	藤原惺窩		一四、一八八
フチハラノトシナリ	藤原俊成		一三七
(シユンゼイ)			

フチハラノミチトシ	藤原通俊		一三六
フチ非タカナホ	藤井高尙		八五
フツソライ	物祖徠		一六九
フドキ	風土記		一七〇
フムヤノヤスヒデ	文屋康秀		八三
ブンガクシ	文學史		二
ブンクワシウレイシ	文華秀麗集		六
ブンゲイルイサン	文藝類纂		三
ヘイアンブンガク	平安文學		三、七
ヘイケビハ	平家琵琶		一八、二七
ヘイケモノガタリ	平家物語		一五
ヘイケモノガタリ	平治物語		一五
ヘイヂモノガタリ	平家物語		一五
ホウゲンモノガタリ	保元物語		一五
ホンガハイウサイ	細川幽齋		一七
ホック	發句		二〇
ホンテウス非コデン	本朝水滸傳		三二
ホリカハ非ノヒヤク	堀川院百首		二七
シユ			
マクラコトベ	枕詞		三、七、四三
マザチカシキ	正岡子規		三三
マスカヤミ	増鏡		一四
マツナガテイトク	松永貞徳		一六
マンエウシフ	万葉集		三、五
ミヅカヤミ	水鏡		一四
ミナモトノシタガフ	源順		九
ミナモトノタカクニ	源隆國		一三
ミナモトノトシヨリ	源俊賴		一三
ミノ、イヘット	美濃の家苞		一六
ミノタマミネ	壬生忠岑		九



ミンコウニフソ	✓ 岷江入楚	一九	ヤマベノアカヒト	山部赤人	三
ム子ナガシソウウ	宗良親王	二六	ヨウキヨク	謠曲	一五、一六、一七
ムラサキシキブ	紫式部	一〇六	ヨニ非ヤイウ	横井也	有 三六
ムラサキシキブニツ	紫式部日記	一〇七、一九	ヨゴト	琴詞	四
ムラタハルミ	✓ 村田春海	三六	ヨモノアカラ	四方赤良	三六、三七
ムロキウソウ	室鳩巢	一九	ラウエイ	朗詠	一九、二〇
モトナリノリナガ	本居宣長	三九、六三、七、七	リウテイタチヒコ	柳亭種彦	二四
モトナリオホヒラ	✓ 本居大平	五八	リンイツセウ	林逸抄	一九
モノガタリ	物語	一〇三	リヨウウンシフ	凌雲集	六
ヤクモミセウ	八雲御抄	一〇〇	ル非カウマ	類柑子	三二
ヤドヤノメシモリ	宿屋飯盛	三六、三七	レキダイワカチヨク	歴代和歌勅撰考	一〇三
ヤマトヒヤクシユ	✓ 山常百首	五	センカウ	連歌	一八
ヤマトモノガタリ	大和物語	一〇三	レンガ	六歌仙	八
ヤマノヘノオクラ	山上憶良	五	ロクカセン	和漢朗詠集	一九

一〇

井ナカゲンジ	田舎源氏	三六
井ノウヘフミチ	井上文雄	一〇四
井ハラサイカク	井原西鶴	三三
チザキマサヨシ	✓ 尾崎雅嘉	七
チザハロアン	小澤蘆庵	三三
チノ、コマチ	小野小町	八
チハリノイヘツト	尾張の家苞	一六一

索引

一一



頁数	行	正誤
三三八	二六三	二三八
三三一	二二八	一九五
二六八	二二二	一七〇
一六四	一七三	一六九
一六二	一七一	一六八
一七二	一四三	一六二
一五八	一三一	一五八
一五四	一一一	一五四
一四六	八九	一四六
一四五	九	一四五
一四三	八	一四三
一四二	四	一四二
一五〇	二	一五〇
七六	三	七六
六五	三	六五
四四	二	四四
三三	九	三三
三二	五	三二
二二	四	二二
三	六	三

一部分の下	支那文學中佛敎	四法文學	譬喩	動物	正月	長瀬正幸	秀麗集	四帖	方丈記酒流	林羅山の下	隨四出	源水抄	ふれき	換骨脱胎	全前	初學	詩拾やら	穉稿	三番變	經世の道眞	荒木田守武	娘月千稱	小架
見の字を脱す	中の字	西洋文學	譬喩	動物	六月	長瀬正幸	秀麗集	四帖	方丈記酒流	野を脱す	隨四出	水源抄	ふれき	換骨脱胎	全前	新學	行	猿樂	三番變	經世の道眞	荒木田久老	娘月千稱	小架



明治三十二年十二月廿七日印刷  
明治三十二年十二月三十日發行

(國文學史十講奥附)

定價金七拾五錢

著述者 芳賀矢一

東京市神田區裏神保町九番地

合資會社 富山房

合資會社富山房社長

坂本嘉治馬

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目  
十二番地

吉岡嚴八

印刷者

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目  
十二番地

印刷所 秀英舍第一工場

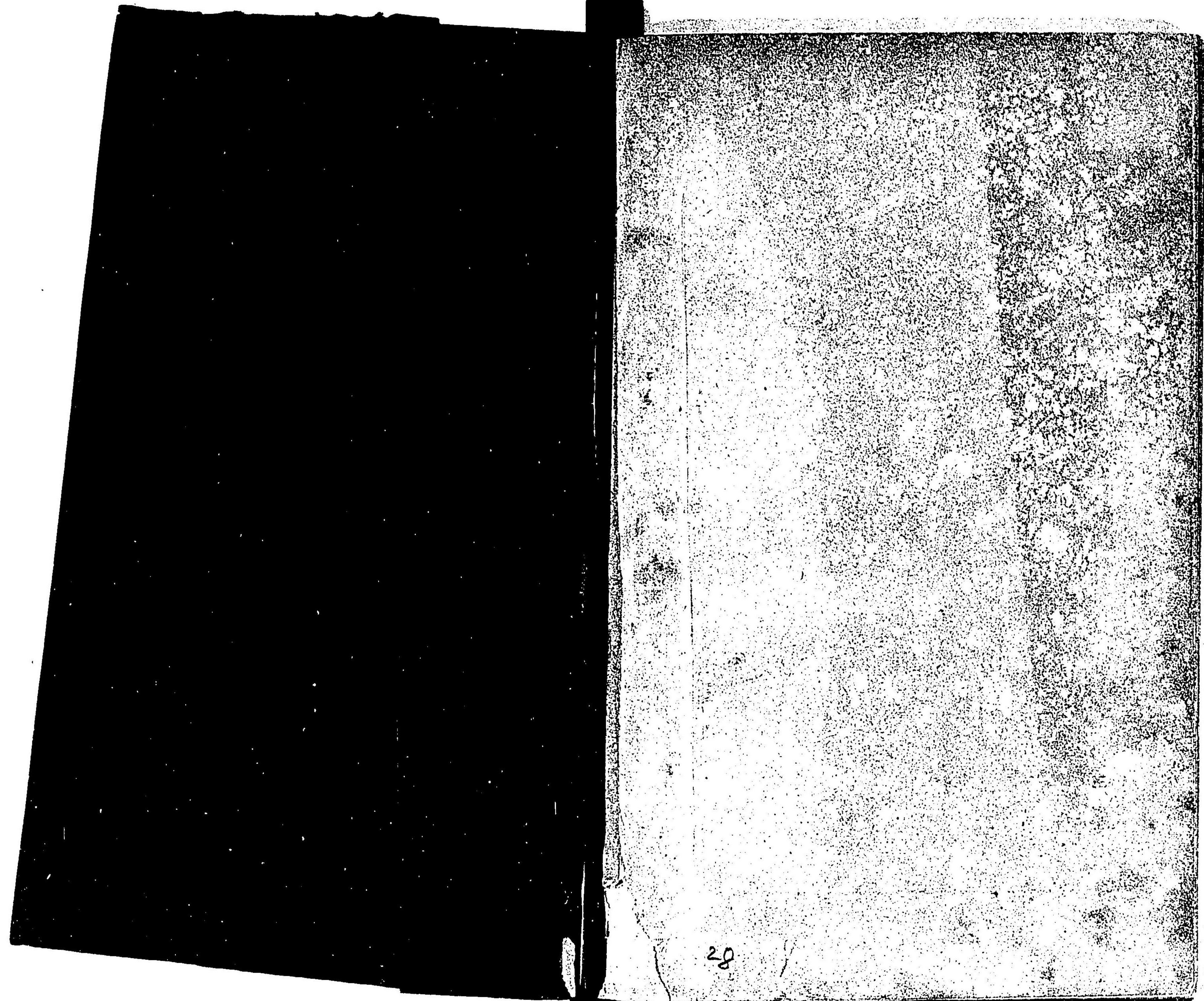
發兌書肆

合資會社 富山房

(電話本局一〇三六番)

不許  
複製



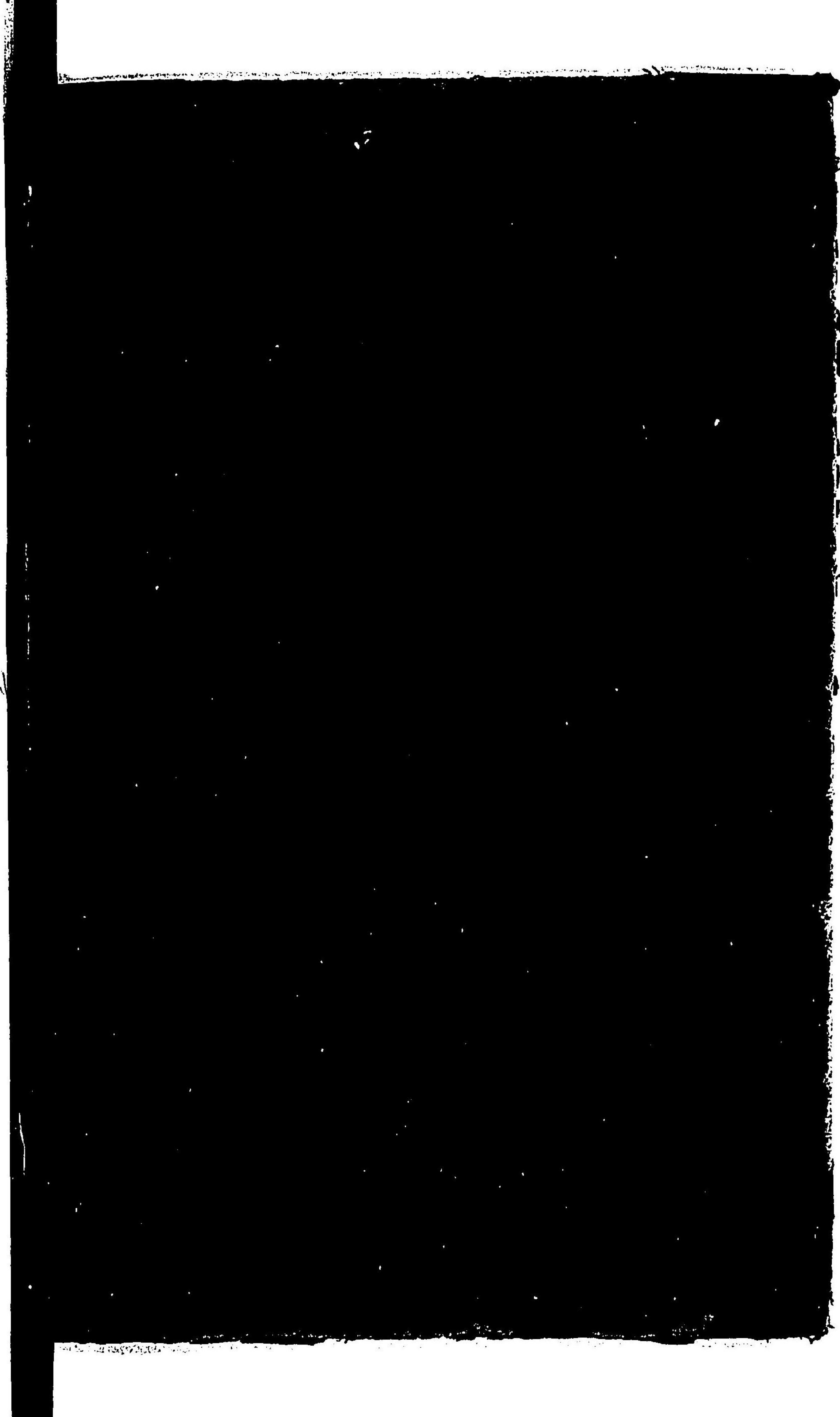


28



86  
93







86  
93

084879-000-2

86-93

国文学史十講

芳賀 矢一/著

M32

DBB-0053





